

内山完造「上海で書いた原稿」(1945年9月～1946年5月)

内山完造研究会編

【凡例】

1. もともと句読点のない文章に、適宜句読点を付した。
2. 原文に付された下線、傍点は、そのまま残した。
3. 旧漢字は、人名以外は新漢字に改めた。読むのがむずかしい漢字には、適宜ルビを付した。仮名は、旧仮名づかいのままとした。
4. 「支那」「満洲」などの用語は、そのまま使用した。

浮世ばなし

色々浮いたことがあるが故に浮世とは云ふなりでは一向まずいしゃれであるが、兎に角浮世とは面白い処である。人がお慈悲心で下さった物を取り次ぐ人々の間で売物になったり、其の又無代の物を渡すのは今渡すが値段は来月の市価の半値見当ですよなんて、まるで取引所の先物見たいなことをしたりしてる間に、其の人々の集まりが何日の間にやら発展的とも云へない解消して終った。サア来月の市価の半値は誰が受け取るべきであらうかなんて人の疝氣を頭痛に病んで居るとアレが無くなるから、今度は何とか株式会社を設立してひと儲けせにゃならん。一体其の登記は何処へするのであらうか。多分登記役場はもう機能が止まって居るのであらうと私は思ふのだが、計画する方では何か便法でもあるのかも知らん。便法と云へばついこの間の話だが、何とか何とか会とか云ふひとかど吾等の指導機関らしい顔してる処から、防空用の砂弾とか云ふものを推奨して買はして下さったが、其の頃にはもうそんな砂弾位で防空にも防火にも間にはあはないこと位はお解りになって居ったと思ふのだが、事によったら事務多端で内地の爆撃談などもお聞きになって居らなんだと見へて、忠実なる無能力指導者たちは一個何百円かで常会の席上で下らぬ広告の手先を勤めさせられた人も相当にあったことと思ふ。広島が原子爆弾で未曾有の破壊を受けて居って、其れ故に遂に急転直下が来た様な革命的新兵器が出現して居るのに、防空壕にはいって居りさへすれば大体に於いて助かるなんて好い気なことを云ふ人間が出たり、平民共よ官に頼れと今日云ふて、明日官に頼るでないぞ一人一人しっかりせよなんて云ふ人も出て来る。

イヤハヤ上海も浮世の片隅らしく面白いことですバイ。今朝も北四川路へ威勢よく護衛兵つきの自動車数が数射的場の方から迂り出して来たのを見て居ると、乗って居られるベタ金の将官方はドウやら中国の方々らしいのである。ハテナと云ふ通り魔がスウッと消へて行つた。ツイ数日前迄は大洋小洋の銀貨を買売して居った路傍の銭攤子が、昨日今日は中央銀行や中国銀行の老票を初め関金券など色とりどりを並べて商買繁昌して居る。国軍歓迎、抗戦勝利などの貼紙がベタベタと処きらはずウインド硝子に貼りつけられて居る。布告も色々貼られて居る。祝賀準備のアーチが北四川路丈にでも七、八つも建てられて居る。定めし当日は賑やかに大雑踏大混雑することであらうと思ふ。ドウカ蔣主席の声明が徹底して流血を見る様なことのない様にと私は今から祈って居る。

退職金や解散金で多くの悲喜劇が至る処に生じて居る。潤滑油の製造とか酒精の製造とかを回って前

渡金だ。何億元が最少で何十億から何百億元、時に千億元と云ふ様なでかいのまであるとかあったとか云ふ話だ。それ等が悉く御破産になった。軍関係の書類は全部焼却すべしと云ふ命令が出たとか出なかったとか云ふことで、此処にも彼処にも一夜成金が雨後の筈だ。戦争と云ふものの手荒さをつくづく見せつけられた。米の千俵二千俵がなんだ、メリケン粉の百袋千袋は雇員の手当だと云ふ様な豪華版が実際あるのか無いのか知らんが、それでも町内会の各戸に両袋三袋ずつも呉れる人があることを思ふと、決して嘘ではないらしい。〇〇女士が一寸訪問したら好い処へ来なさったと早速五千万円が現札で奉納されたとか云ふことは確かに私も現物を見た話だ。吾々は百人近い店員に毎日朝九時から五時迄働いて貰ふて何年かかって五千万円と云ふ大金が儲かるであらうか。年一割の配当をするには相当の苦勞をするのであるから、吾々は聞く丈でモウ気が遠くなる様なことばかりである。米英中ソと並んで立派に戦勝の大独立国である筈なのにドウしたことだ。中国海関総稅務司には米国人のリッツルと云ふ人が已に就任したとのことである。リッツルならざるグレート事件である。日本が敗戦したから朝鮮は当然独立国となると云ふので、毎日毎夜の前祝ひをして居たら、三十八度の一線から北がソ連で南は米国が管理すると声明されて前祝ひは火が消へた様になった。華南は英国、華中は米国、華北へはソ連が出て来ると云ふ噂が出て来た。それでは中国は八つ裂きにされる、コンナ事ではなかったと頻りに心配して居る人々もある。新四軍と政府軍との折合ひが甘く行かないと上海は混乱に陥る恐れが多分にあると杞憂して居る憂国の士もある中に、日配会社の展示品を中国側の聯合出版公司へ寄附させてはドウかと云ふ様な誠に殊勝なことに奔走して呉れる小川老の様な人もある。イヤハヤ浮世は面白いものだと、私もドウヤラー一寸落ちついてコンナ漫談でも書ける様な氣にゆとりが出来た様である。希くば近づきつ、ある杯よ、吾等に幸ひをもたらしして呉れ。されども吾が心を強いるにあらず、神よ御心にまかせ給へ。

二六〇五〔一九四五〕年九月四日

蒸し返し

蒸し返しと云ふことがある。実に面白いことだ。一度決まったことをまたやりなほすのであるが、それが今度の私の関係の退職手当の問題で、トウトウ此の蒸し返しの事実に直面したのである。それは初めに六ヶ月と云ふ申し出があつて、二ヶ月と云ふ申し入れをした処がダメで、私が二ヶ月半と云ふ処まで持って行ってトウトウ物別れとなつた。初めの日が郵務工会の二人の立会で明日になり、明日が又二人の立会でダメになつたのである。そこで此の二人が帰つた後私達を軟禁しての強談となるのであるが、其の間に長谷川君が眞木君を頼んだので藍衣社の某とか云ふ者が出て来た。そして其の人が誠に手取り早く事件を片づけて呉れて、明日午後三時に取引きすることになった。処が其の明日になって更に支那人側から四人の憲兵が出て来て、此の話は無効である、改めて吾々が命令すると云ふ高飛車である。スッタモンダの拳句が昨日の某を捕縛するのだとかなんとか云ふて出て行つたが、又も私達は軟禁だ。然し実はそれ迄に、強制的に三日以内に全額貳万万〔億〕と壹千壹百元をつくって渡す様との事で調印させられて終つたのである。某を捕縛して来る迄待てと云ふことで待つて居たらモウ八時を過ぎた。大雨の中オートバイを出して走つて居つた憲兵さん四人は眞木君を探しあてて、眞木君から問題から手を引くと云ふ電話が来て、眞木君との間は解消したことになった。此れで始めから蒸し返しが三回で四回目の決定が昨日のことである。そして私達は決心せざるを得ないことになった。此の蒸し返しは初めの六ヶ月の申込みに冷淡であつた為郵務工会の立会となり、それでもダメであつたので一日延ばしたのであるが、其の延ばした一日が郵務工会に又無駄足となつた上に、工部局警察だとか某とかの立会調停で出来ないと思ふたら、其の方が其の手なら此の方は此の手と、憲兵の強制と云ふことになったのである。モウ絶体絶命である。此れからつらつら考へると、問題の解決は早いに限る。従来様に引き延ばしや切り崩しは、モウ今日では役に立たんでもないが大体有効ではない様だ。矢張り方法は巧妙よりも拙速である。特にこちらに何か有利な確かなものがあれば兎に角だが、無ければダメだ。而も今

度は支那側の上層は堂々の宣言をして居るが、実際方面は全くの復讐である。かつて日本人が戦勝に際してやった通りのことをやって居る。昨日も云ふた、日本憲兵が支那人を如何にしたかと云ふことを知って居るかと平気で云ふて居る。モウなんとしても免れぬ、吾々の呑まねばならぬ杯である。度胸を据へて呑むべしである。出来るか出来んか奔走して最後は神にまかせる丈であるが、考へられることは国家の無情と云ふことである。

二六〇五〔一九四五〕年九月二日

新発足

米山さんが来て、陸軍が女軍属を九百人ばかり集結して保護して居る、これは悉く青春の人々である、処が此の一団について非常なことが起つて来たと言ふのは、米国軍から全部引渡せとの申入れが来たのである。其処で取りあへず呉淞へ移したが何とか人道上の問題として安全ならしめる様にして貰ひ度いと云ふのである。実はそれは大変であるが、戦争と云ふものが何故に否定せられるものであるかと云ふことを考へて見れば、別に驚くことではない。あらゆる人道を無視したことが公然と行はれる、それが則ち戦争であるのだ。それ故にこそ最悪の平和も戦争に勝ると云はれるのである。吾が日本にはこの言葉が少しも受け容れられて居らなんだ。日本人は尚武偏重の外何ものも受容することをしなかった。特に近年左翼の勃興の反動として抬頭したファツシヨやナチスの運動が盛んになるや、日本は軍人一色に塗りつぶされて終った様なことになった。同時に力は最後の正義なりと云ふのは、云ふ様な方面に向かつて猛進を始めたのであった。一人の非戦論者なく、満洲は日本の生命線であると云ふ標語さへも後からつけられると云ふ始末で、謀略の跋扈日一日と露骨になって来たが、トウトウ柳条溝〔今は改称して、柳条湖と言う〕の爆発となってここに満洲事変が突発したのである。其の満洲事変の発展が漸く思ふ様に進展する処に勢余つて北支事変となり中支南支となったのはよいが、それより南は南海であるので戦争の相手が無い。重慶に移動した中国軍は日本軍の空襲爆撃にも拘らずひたすらに隠忍するのみとなった。満洲から南支迄の広大な占領はしたが、それはタダ日本軍が駐在して居る区域と云ふ丈のもので、遂に中国の民心を占領したのではなく中国の土地を占領したのでもなかった。かくて戦争の終結は果して何れの日か、流石に強豪を誇った日本軍もジレざるを得なくなった。戦ふて五年未だ下す能はず、速戦速決を標榜しながら手も足も出なくなった。国内の情勢も漸く民心軍より離れんとするやに思はれし頃内閣の交替度々あり、それは英独戦争が日本を巻き込まんとするに際して、米英陣に行くべきか独伊軍と結ぶべきか、つまり日支の行き詰まりの転換を此に認めたワケである。

然しながら、両者の何れに加担すべきかと云ふことになっての紛争であったのだが、遂に独伊軍と結ぶことになって十二月八日の大戦が開始されたのである。マサカと思ふて居った世界戦争への巻き込みがトウトウ実際になった。中国でさへも自分の力ではなんとも出来なくなった時に、又米英を向こふにして向かつて開戦するなんて、考へて見れば日本軍閥も血迷ふたものであると思ふた。然しモウ取返しはつかない。此の時日本の内閣は全大臣は殆ど軍人であった。代議士にも多くの軍人が出た。全日本は全く軍人が提げて居る鞆の如き状態であった。国民は漸く食糧難に向かつて居った。日支は膠着したままである。少しも進展しない米英戦争は、始めの間奇襲や夜襲の有効であった間は万歳万歳であったが、アツツ、ガダルカナルを契機として甚だ面白からざることになって来た。つまり相手方の戦術が漸く充実して来たのである。国民の腹が漸く減って来た。大陸の軍はモウ少しもジツとして居ることは出来なくなった。長沙、衡陽に向かつて進展せしめたが、時は已に後れて居る。マーシャルを失ひサイパンを委ね硫黄島から琉球まで失陥して終つて、竹槍の研究が真面目に考へられると云ふ今から思へば滑稽至極のドン詰りになった。トウトウポツダム³の三国宣言は無条件降伏受諾で大団円となったのである。

連合国軍の日本進駐となった此の大団円の間際になって、ソ連邦が電光石火的に対日宣戦を布告して満鮮に席捲して来た。吾々中国の在留日本人も軍の武装解除と共に第一次虹口区内居住の命令が湯恩伯

軍から出されたが、第二次臨時居住地域が決定されて又も移動せなければならんことになった。今度は第一区第二第三区第四区と区域別が出来た。然し此れも矢張り臨時のことであって、やがて又第三次集結が号令されるのであらうと思ふ。此の時に当って吾々居留民の状態はドウであるかと云ふと、実に不徹底極まるものがある。戦争は済んだのだ、平和になったのだからと云ふ考へ方で居る人々が多い。然し武器に因る戦争は止んだが、未だ終結にはなつて居らん終結に進んで居るのである。無条件降伏の結果として吾等は敗戦国民である。そこで凡ては其の管理国軍である中国軍の命令に従つて行動せなければならんのである。吾々は中国人と対等の権利は全く無くなったのである。吾々は命令のままに動くより外ないのである。在留者は此れに徹底しなければならんのである。吾々はかつて大使館あり領事館あつて其の命令を絶対として動いて来たのである。然し今度は中国軍湯恩伯將軍の命令に絶対服従することになったのである。今や大使館、領事館、居留民団等は全く解消するに至つた。此れに代つて自治会と云ふものが生れて色々と善処して来たが、色々の点から此れも解消して（大使、領事が主掌して来たから）、民間人によって命令伝達善処機関を造れとのことで、いよいよ昨日その委員十五人が決定した。其の顔ぶれは、船津、山田、波多、小川、内山、岡本、阿部等であつた。新発足である。

二六〇五〔一九四五〕年九月二五日

路はタダ一筋だ

我々は敗れた、無条件に降伏したのだ。それは一面から見ると誠にみじめなものである。我々が今日人間最後の抛り所である絶対なるものを失ふた為、我々はまるで夢遊病者の様にフラフラになつてゐる。現在日僑の思想はと聞かれたらフラフラ思想ですと答へたらよいであらうと思ふ。然しモウ一面から考へて見ると、我々は負けた其の負け方は徹底的である処の無条件降伏であるから、何のことはない、此れより以下の負け方はないドン底的な負け方である。だから我等の今後はモウ負けようにも負け方がないのだ。我等の明日は勝利への一歩以外に路はないのである。一面から見ると日本はモウ世界落伍者にならされた様である。恐らく世界中の大戦勝利者はそう思ふて居ると私は思ふが、然しそれは我々が今日迄支那は後れた国と思ふて来たのと丁度同じことであつて、戦勝国は必然的に此れから軍備を拡張せなければならん様になる。そして、それは平和を來らせる為のものであると云ふに違ひない。つまり世界を平和ならしめる為の軍備だと云ふのであるから、目標を平和に於いての軍備である。我が日本は此の時にモウ軍備をする必要は頭から無いのである。タダ一足お先にと平和に向かつて突進すればよいのである。此処に面白いことが出来るのである。吾々は戦勝国より一足お先に進んで居るのである。進むことが出来る様になつたのである。一面から見れば落伍者に見へるが、一面から見れば一足お先に失礼して居ることになるのである。落伍者と見れば悲しくもなるであらうが、一足お先に失敬して居るとなれば何の悲しいことがあらうか、反つて愉快になるのである。自らに勇氣は百倍するのである。吾々はモウ此れ以上に負け様はないのだ。タダ勝利に向かつて進むより外に道はないのである。

一九四五年十一月十一日

時局偶感

日僑銀座が吳淞路であるなら、狄思威路ディスウェルから宝安路、スコット路スコットは日僑新宿と云ふ処ではないかと思ふのでありますが、其の銀ブラや新宿ブラに於いて特に感じますことは、かつては元氣旺盛であつた潑刺たりし青年壯年が何と云ふ変り方でありませうか。其の歩き方が第一にガラガラブラブラであります。かつてはシヤンな姿であつた洋服も漸くほこりっぽくなり汚れさへも目に立つ様になつて、一見しほれかけた花と云ふ姿に見へるのであります。無論それには大きな敗戦と其の為の失業と云ふ原因があります。先日或る中国の文学者が此の頃上海の日本人はドンナ思想を以て居るかネと聞きましたから、私はスグにフラフラ思想家だよと答へたわけではありますが、兎に角今日の吾々は迷へる者と云ふ一語で

大体間違ひない様に思ひます。それは未曾有の大転換に直面して居るからであります。勝利者とのみ思ふて居った者が一朝にして敗北者となったのであります。丁度高い岩の上から深い淵を目がけて飛込んだ様なものであります。途中から浮かび出るとは出来ない、ドン底を打たねば浮かび上るとは出来ません。水上に浮かび出る迄の苦しさはナカナカであります、苦しいからと云ふて悶へても愁へてもそれはより苦しくなるばかりであります。此の時の秘訣は、タダ静かにドン底をつく迄無理をしないで辛抱する事であります。此の秘訣は中国人はよく心得て居ります。何日か私は中国人の生活は昆虫生活と同じだと申しました（公園の大木と昆虫の話）。吾々の今日の実行はすなほに苦難を受けて忍耐するべきであると思ひます。それは甚だ消極的ではありますが、急がば回れであると思ひます。昨日まで天下に号令して全国民の信頼を受けて居った大臣大将が、今日は戦争犯罪者として法廷の被告席に立つ様になったのであります。十八年間も牢獄生活をして居った政治犯人思想犯人が牢獄を出て来ました。其のトタンに日本の政治について堂々と国民に呼びかけられる位の事ではなく、昨日迄は八千万人の一人も一口も云ふことの出来なかつた皇室制度について、イヤ絶対者であられると教へられた天皇制についてさへ論じることが可能になったことは、已に新聞で御覧の通りであります。前科者の社会主義者が共産主義者が東京の白昼に堂々と其の主張を国民に呼びかけて叱られもせない時が来たのであります。非常に優れた人でない限り、迷ふたと云はれても迷はずには居られない時が来たのであります。特に吾々をかく迷はせるものは何であるかと考へて見ますと、其の一つは、かつて法は絶対である、道理を破る法はあるが法を破る道理なしとまで字書の中に注釈された其の法が、まったく無力になって終つた。吾々の最後の拠り所であると信じて来た絶対が、今日は吾々を見はなしたことになるて居ります。絶対を失ふた吾々の今日の姿がフラフラであるのは、何の不思議もないことと思ひます。国法は絶対であると教へられて其の通り信じて来たことは全く嘘でありました。迷はざらんとするも得ざらんやであります。吾々は絶対観を確立する必要があります。負けても勝っても動かない絶対を吾々は持たねばなりません。支那の人々は絶対なるが故に絶対であると申します。其の絶対は宇宙の原則を指して居る様であります。吾々のよき参考であると思ひます。私の処へ来る人々の中に、色々内地の上海の街の噂を伝へて呉れる人が沢山あります。昨今聞いたことではありますが、朝日新聞が赤であるとか、代議士の誰は前科者であるとか、誰は何年入獄した犯罪者であるとか云ふことが云はれて居るとの事であります。私は其の噂が果して適中して居るかドウか知りませんが、間違はない様にしたいことは、自分の力は朝日新聞を批評するのに足る丈の批判力が果してあるや否やであります。

今日日本の一日は、漠然たる流言飛語で人の仕事を罵って痛快が居る時ではありませう。果たして、批判力に確信があるなら、堂々の論陣を張るのがよいと思ひます。無責任たる流言飛語による陰口の攻撃は止めるのがお互ひの賢明であると思ひます。支那人はアワテテ居る様でも落ちついて居る、支那人が今首を落とされんとする時、打ち殺されんとする時の態度の立派さは人皆の知る処である。それは「天曉得」[天のみぞ知る]の一語で解る様に、彼等は天の絶対を信頼して居る〔からです。〕又前科者とか犯罪者とかの噂についても、前科とか犯罪とか云ふものには少なくとも二つの種類があります。強盗、放火、強姦、殺人、詐欺、竊盗等の様な破廉恥罪と、政治とか思想問題とかによる罪科とでありまして、破廉恥罪の方はドンナ時代にも何れの国に於いても明らかに犯罪であります、政治思想犯は全く違って居ります。此れは或る政治の時代には犯罪となり、或る政治の時代には立派な功労者ともなるものであります。政治の時代が変わると云ふことは云ふ迄もなく革命であります。

革命ならざれば罪人となり、革命が成功すれば栄冠を頂く功労者であります。中国に於いてかつてのお尋ね者孫中山先生は今日の国父であります。捕縛命令の出で居った魯迅先生は果たして罪人でありませうか。明治の元勳達が明治の維新が成功したが故に元勳となられたのであって、万一にも失敗せんか犯罪者であつたに違ひないと思ひます。「勝てば官軍、負ければ之れ賊」と云ふ言葉は、この間の消息を十分に物語って居るものであります。小塚原の刑場の露と消へた吉田松陰に於いて、又西郷隆盛の生

涯に於いて明らかにそれは見る事が出来ます。古くは、耶蘇はローマの国法によって強盗と共に十字架にはりつけにされた大罪人であったのでありますが、今日迄人類の救世主として世界の尊崇を集めて居られるではありませんか。日本の廿六聖人や五十二福者と云ふ切支丹殉教者は、日本に於いてはかつて大罪人として極刑に処せられた者であります。世界中のローマンキャソリック教徒の間では聖人である福者であると尊敬をはらはれて居ります。二月五日と云ふ日は毎年世界中の天主堂に於いて廿六聖人のお祭りが行はれて居ります。日本の教科書の歴史にこそ一行も出ては居りませんが、徳富蘇峰の『日本国民史』の中には日本の切支丹の殉教に対しては絶対的の讚美が捧げられて居ります。内田魯庵の随筆集（獺の舌）の中にも無条件の礼賛がされて居ります。姉崎博士や新村博士の数種の書物の中に如何に取扱はれて居るか、皆さんは十分御承知のことと存じます。宗教や政治や思想の犯罪や前科は問題になるものではありません。今日は時代の大転換でありまして、あらゆる政治犯思想犯は自由に許されて代議士の候補者ともなる事が出来る、政党の首領となることも自由でありますことは私が云ふ迄もありませんが、そんなことによって有力なる人々を排斥する様なことがあっては実に時代錯誤の甚だしいものであると思ひます。宗教信仰も自由になりました。吾々は知らずに居りますが、重慶には日本軍によって編成せられた特別横隊があると申します。延安には日本工農学校があつて百七十三人の学徒があると云ふ時代の転換を知る、此のあたりが頭の切り替への幼稚園ではないかと思ふものであります。只今も申します様に吾々は時代の大転換に直面して居ります。其の渦中の人間であります吾々の考へが依然軍国主義時代の頭であつてはならん、新日本の建設には新しい頭が必要であると思ひます。

即ち軍国主義、侵略政策の結果としての今日の大転換であります故に、吾々の頭は其の反対である平和主義、友愛生活に転換せなければならんものと私は考へて居ります。尚武偏重の教育時代から転落した我が教育は、平和尊重の教育に転換する時代になったのであります。軍備は撤廃され武装は解除された日本の姿は、一面から見ますと誠に口惜しいなさけない淋しいばかりでなく、今日からの一步一步は誠に苦痛と艱難の生活をせなければならんことは必然であります。特に皆さんの様にかつて軍国教育の専門家であつた方々に於いては、感慨深いものがおありになることと思ひます。新たに出来た寺小屋式中小学校の教壇にお立ちになることを、恐らく非常に苦しんでおいでになることであらうとお察しする次第であります。深くお考へになる方は誠に熱鉄を飲む様な思ひで良心の苛責に苦しんでおいでになる方々もあることと思ひます。私は皆さんの立場に対して心から御同情申し上げるものであります。然しながら、如何に御同情申上げて見た処で現実の苦痛をどうすることも出来ないものであります。

此処の一つお互ひに考へ度く思ひますことは、前にも申しました様に吾々の頭を此の際右から左へ転換させることであります。先日の子供の優越観の払拭と云ふ様な記事を見ましたが、子供等は大体に於いて已に転換が出来ている様に思ひます。昨日迄鉄甲を被つて木刀や木銃を持って突貫とか切込みとか云ふ様な遊びばかりして居りましたが、今日の彼等はモウそんな遊びをして居る子供は見受けられません。パン屋さんや納豆売りや野菜売りの真似をして居ります。土饅頭を造つて「上等のおまんじゅうが一つ弍千元です」と云ふ様なことを云ふて居ります。又接客とか封印ごっことか云ふて遊んでも居ります。家宅搜索の真似をしてお金を渡してモウ探さないで下さいなんて云ふて居ることもあります。大体に於いて子供等の頭の切り替へは出来て居る様であります。彼等が中国の子供に対する態度は先日迄は大変に傲慢でありました。それは優越観の払拭が云はれる程にあつたのでありますが、今日私の見て居ります処では此れも大体心配ない様であります。彼此子供同士は大変に仲良くやつて居る様であります。

私の心配なのは寧ろ大人の方であると思ひます。大人の言行にはゴマカシがあります。此れが一番心配であります。実は私は、今日の敗戦日本の原因の一つは従来政治や教育が非常に不真面目であつた点にあると思ふております。何がそんなに不真面目であつたかと申しますと、全部とは申しませんが、政治は看板政治であつた、教育は看板教育であつたと私は思ふて居ります。つまり平和を看板にして軍国主義の侵略政策を行つて居つた、文治友好を看板にしながらかつて尚武偏重の教育をして来た、文部大臣は

伴食大臣と云ふことによつて解ります。別の言葉で云へば、羊頭狗肉であつたと云ふのであります。中支の米穀聚買は表面は適正価格の買上げであつて、事實は強奪であつた。女学校の卒業証書はお嫁入りの道具であり、学位は男子の結婚の看板であつたり、お医者様なら医学博士は客引きの看板であつたりした事は、全く嘘とは云へない。看板何々と云ふ所以であります。

私の商売で実例を申します。中等学校の教科書は男女を問はず大体何々博士著と云ふのが沢山あります。皆さんは御承知でありませう。果たして何々博士の著書でありませうか。私は断言します。大部分は無名の作者の著述であつて、博士の肩書きを看板にして販売上の商略として純真なる学生を騙して居つたのであります。多くの漢和辞典や国語辞典は悉く何々博士の編であります。其の広告には博士十年の結晶とか何とか書いてありますが、此れが又大体に於いて嘘であります。辞書は他の人々が編輯して居つて博士の名を借りて来ての看板であります。かくの如く嘘が白昼横行闊歩して居りますが、この事に対して先生方から父兄方からの抗議の出たことを不幸にして私は知りませんでした。御存じなかつたとすれば止むを得ませんが、知りながら一言の抗議もしなかつたとすれば無罪と云ふワケには行かないと私は思ひます。新刊書の広告、化粧品のの広告、売薬の広告悉く嘘でありました。八年に渡るイヤ満洲事変以来十余年に渡る大戦争に當つて、内心如何に反対して居つたとしても現実に反対を唱へ得なかつたならば、仮へどんな事情と条件があつたとしても対外的には吾々は其の連帯責任はまぬかれないものであると私は思ひます。

先日来石原將軍や近衛公や近く真崎大將の声明が新聞に出て居りましたが、あれが皆ホントに彼の人々が云はれたことに間違ひないなら、なんと驚くばかり低調の言葉であると私は思ひます。モット男らしく責任を負ふて貰ひ度い、仮へ如何なる事情と理由があつたとしても戦争遂行に反対なら真正面から此れに反対を表示すべきであつたと私は思ふ。それを〔なし〕得なかつた以上、如何なる言葉の弁明も何の価値もないものであると私は思ひます。対外的には同罪であることは免れられないものであると思ひます。国民総懺悔と云はれたのは対外的には当然であると思ひます。対内的には引きずつた人々に対して引きずられた人々は一言云ふても差し使へはないが、対外的には吾々は匹夫の責を負ふべきものであると私は信ずるものであります。誠にひどいことを云ふ様であります。かつての軍国教育を善なりと信じておやりになつた教師先生の方々は今日では知らずして犯した罪と云ふ事になると思ひますが、若しも心の中には反対の考へを持ちながら引きずられて子供等に軍国教育を施して居られた方があつたとすれば、矢張り連帯の責任はまぬかれないと共に、子供等に対する虚偽の教育をされたと云ふことも、一応成立するのではないかと思ふものであります。それ故に、先生方が今日再び教育の専門家として教壇をお持ちになる時に良心の呵責をお感じになるであらうと思ひますが故に、御同情申し上げる次第であります。

軍備と武装を丸裸にされた日本人の将来への再出発は如何にすべきでありませうか。此れが根本には吾過てりと云ふ懺悔あやまがなくてはならぬと思ふ。此の懺悔の心を土台として新しい一步を踏出さねばならぬ。私はナマナカ小刀細工は無用である、小細工はすべきではないと思ひます。先の大戦に敗北した独乙は復讐を目標として再出発したのであります。其の準備が出来てそして今度の勇猛な戦争が始まつて、遂に亡国となつたのであると私は信ずるものであります。日本の敗北は独乙の先の大戦の敗北と同じ立場であります。恐らく皆さんの中には、己れ見て居れ敵を打つて見せるぞとか七生復讐するぞとか云ふ様なお考への方々もありはせんかと思ひます。私も個人的感情に於いて思ふこともないことはありませんが、日本民族と云ふこと日本国と云ふことを考へる時に、其の間違ひであることを悟るのであります。殷鑑遠からず、前轍は独乙にあります。戦勝国側に於いても独乙の前例があります故に、日本をして武力による再挙が出来る様なことは断じて赦さないと私は思ひます。吾国の此の度の敗戦の因を物心両面に私は見て居ります。物の面に於いては、質と量とに於いて負けたことは已に大本營発表によつて明々白々であります。毎日見て居る飛行機やトラック丈見て居つても肯けるものがありますが、心的方

面に於いて私はより重大なる敗因を見て居るものであります。

それは彼の柳条溝の一発であります。アレは張学良の爆破と伝えられたのでありますが、中国側及び諸外国は全部日本の陰謀と云ふて居ります。私は満洲に於いても其の事を聞きました。張作霖の爆死などから考へます時に、其の絶無を保し難いと思ふて居りましたが、満洲で責任ある或る人から確かに間違ひないと聞いて、心的敗因は此処に在ると思ふて居るものであります。つまり嘘が最初の一発であるとすれば、八百万の神々も照覧あれ、嘘や偽りの出発が神の御旨に副ふて完成するものであるかないか。私は残念ながら事変の前途に光明更になしと常に話して居ったのであります。今日を見て来る可きものが来たと思ふ感じだけであります。私は私の不甲斐なかつたことを国に対し民族に対して誠に慚愧に堪へないで居るのでありますが、而も今度こそはと再出発に際して昼夜一生懸命に其の路を求めて居ります。そして只今までに求め得たものは、新日本の目標は文字通りの平和主義、友愛生活でなければならぬと考へて居るものであります。一人の殺人が最大の罪悪であるならば、千人の殺人は千倍の罪悪であると私は思ひます。

それ故に戦争は罪悪であると思ふのであらうと私は思ひますが故に、戦争なき八面玲瓏硝子張りの平和の日本を造り上げねばならぬと思ふて居ります。日本の姿は今一面から見ると誠に哀れな姿であります。モウ一面から見ますと実は必勝と云ふことは云へませんが、全く不敗の立場に立たされて居るのであります。無条件の降伏でありますから此れ以上の負け様はないのであります。モウ負け様にも負けられない立場であります。立ち上るより外に路はないのであります。戦備の大拡張が行はれるであらうと思ひますが、吾が国は此の重荷から全く解放されたのであります。諸国が目標として居る平和に向かつて実は日本は一足お先に接近して居るのであります。一足お先に平和に接近することが出来たと云ふことは、吾等の感謝せねばならぬことであります。此の感謝なくして新日本は決して生まれぬと思ひます。無論現在の日本は転落したばかりでありますから、尚深く深く沈み行く事と思ひますが、やがて其のドン底を打ったならば、反動によってキット上昇して来るに違ひありません。それ迄には尚幾多の苦痛と艱難とがありますが、病んだ後は丈夫になる、悲しんだ次には喜びが来るものであります。吾々は安心して無理をすることなく小刀細工をすることなく極めてすなほに沈む処まで沈んで行くべきである。途中から浮かび出ること断じて出来ないことであります。

必要なことは忍耐であります。吾等は由来短気であつた、また非常に積極的であつた。消極的である、気長に働く、気長に待つと云ふ訓練に欠けて居りました。此の度の立場は此の消極的な忍耐と云ふ事の民族的訓練であると思ひます。そして平和を目指して文字通りに進みさへすればよいと思ふて居ります。右顧左眄の必要はない、お互ひに純真な心で平和の路を進むこと、平和は平和によってのみ得られるものであることを固く信じて踏み出すべきであると思ふて居るのであります。過去における過ちに懺悔しつゝ、新しく与へられた立場を感謝して受け、与へられた苦難の杯を忍耐して飲み干し、世界平和の中心となる覚悟を以て全民族が挙つて奮闘努力せなければならぬ、此の路のみが吾等に許された路であると信じて居るものであります。

最後に、かつて日本に於いて一向認められなかつた剣によって興る者は剣によって亡ぶ、最悪の平和も戦争に勝ると云ふ言葉を、お互ひに十分味はうて見たく思ひます。尚、私の考への最も好きで参考となつた者は、墨子の兼愛主義と世界に僅か十万人足らずの信者であるクエーカー宗徒の生活と水の力でありました。此れ又皆さんの御研究を御願ひ致します。

一九四五年十一月十九日

宿かさぬ人の心をなさけにて、おぼろ月夜の花の下伏 蓮月尼

「不了解の二三」

「勝てば官軍、負ければ是れ賊」とは千古の金言だ。敗戦と共に流石の日本もあらゆるカラクリや偽

瞞が暴露された様である。然し一面新日本の進路も見へる様に思はれる。イヤ何となくそれはハッキリとなったと少なくとも私自分は考へて居るのである。上海と云ふ現地に於いての出来事で尙未だ私に莫明其妙なことが二つ三つある。其の一つは、未だ戦争の最中にドンドン論功行賞の行はれた事と共に、戦死者の為に陸軍は陸軍で大場鎮に海軍は海軍で虹口公園から程遠からぬ八紘園と命名された処に各々の忠霊塔の建設されたこと、日本に於いては一つの靖国神社に合祀されることになって居る。其の生命を国家の為に捧げた人々の為に建てられる忠霊塔が、陸軍と海軍と各別に造られたのはドウした理由であったのか、今日も尚わからないものである。アスターハウスと云ふホテルが改造されて、偕行社と云ふ何のことはない陸軍々人専門の妙な女即ち廃業させた芸者を給仕と名前替へさせた様な料理屋が、民間料理屋が閉鎖されると入れ違ひに出来たこと（民間料理屋の閉鎖も実は表門だけであったかも知らんが）、一般民間人は料理屋へ行くと云ふ様な贅沢はしてはならん、然し自分等軍人丈は明日死ぬるかも知れないのだからコンナ贅沢位はやってもよいと云はんばかりのアノ傲奢振りは、どう云ふわけであったか今も解らん一つである。更に、一度木炭車に改造された自動車の燃料をアルコールに切り替へるについて、アルコール製造の急があったと見へてまるで雨後の筍の様に化学工業とか酒精工場とかアルコール製造工場などと云はれるものが出来た。そして昨日迄の無一物の人でも今日は工場主になった。アノ大騒ぎは一体どうしたことかと云ふと、それは軍からの前渡し金によるものだと云ふことであったが、八月十五日と共にこれ等無数の工場が其の書類の煙滅の如くに消へて無くなったと思ふが、それは一体どうなったのであらうか。前渡し金と云ふからには渡した側と渡された側とがある筈である。そして何れにも責任者が居った筈であるが、此の始末はドウなって居るのであらうか。私が聞いた処では一口少なくとも何億元、多いのは何百億元と云ふ様なものもあったとの事である。此の大きな結末は一体どうなったのであらうか、私にはそれが不思議に思はれるのである。チャンと其の結末はつけられなければならぬのである。渡した方も渡された方も此のままねこばばでよいのであらうか、個人の責任回避の為に国家の大損害はねこばばにしてもよいのであらうか。私が不可解の最大なものである。

一九四六年一月六日

内戦の停止

国共の内戦に対して吾々日本人の間に色々の観察が行はれたが、大体に於いてこの内戦を米ソ第三次世界大戦の前哨戦と見る人が多かった。中には、此の内戦に北方の日本徒手官兵が一役買って出て其の為には日僑迄が非常に好都合になりつつある、此の内戦の発展は在留日僑の為に何か救ひの綱でもあるかの様な考へ迄持つて居る人が多かった。然し私は同じ兼？ねた中国側の人々の意見では、重慶側も延安側も何れも楽観説であった。特に夏衍先生などの説は、内戦が非常に発展すれば外国が仲裁するよと高をくくって居った。崔万秋先生も心配ないと云ふて居った。夏巧尊先生はやや心配して居った。然しそれは、両者の背後関係如何によって決すると云ふことであった。そして遂に夏衍先生説が的中した。米マーシャル大使の仲裁によって見事に調停されつつある。先ず戦争の停止が発令された。そして協商会議が着々として進行してる。私は、此の内戦は労働争議の時の声援の爆竹である、国共の協商を促進せしめる為の戦争であるから、決して拡大しないと見たのである。そして今日の停戦と協商の進捗は、先ず先ず私の見解が間違ひではなかったことを弁証して呉れた様である。

一九四六年一月一七日

因に国共両方の主張を見て居ると、かって私が中日戦に野球のチェンジを以って見たが、今日の国共両方も同じである。国民政府の消極的なる共産政府の積極的なるは、明らかにこれを物語って居る。

読後の感

『新生少年』の第五号に志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」と云ふのが転載されて居る。此の小さい文章は実に面白いものであるが、少年には一寸著者の言はんとする処が那邊にあるか把握することが困難な様に思はれるのである。つまり瓢箪が何を意味して居るかと言ふことである。学校の先生が雲右衛門が好きと言ふことによって対照もされて居る様だが、ドウも此れも一寸こどもには解りかねるであらうと思ふ。此れには解説が必要であると思ふ。特に、今日編輯者が此の文を此処に取り上げたことは賢明であるが、解説をかへなければ折角の賢明が其の効果を半減すると私は思ふ。根本は瓢箪は何を象徴して居るのである〔かである〕。それを子供に解らせることなしには、此の名文は反って清兵衛は叱られるのが当然と云ふ様に印象されるのではないかと思ふ。

一九四六年一月一七日

治水と難民

中国に於ける治水の方法は、黄河とか滙水とか長江とかが雨期になって氾濫する其の氾濫水を処分する方法を云ふのである。特にそれは、黄河と滙水とによって発達した様である。地図を開いて見ると、網の様になって居るクリーク（溝も塘も浦も涇も浜も凡そ舟の通じる水路を総称して云ふ）と無数の湖沼沢地は、一目して治水の重要をうなずかせるものである。文章の中にも百瀆とか三十六浦とか三十六壩とか云ふ様に数字で沢山のことを示して居るのである。誰でもそれは気をつくことであるが、然し此の一目にして気をつくクリークや湖沼などのペラポーに多いが故に、治水の必要があると思ふことは一面であって、実は此れ等のクリークや湖沼沢地が治水して居るのだ。云ひ換へれば治水の道具であるのだ。それなら治水されるのは一体何だと云ふと、それは黄河や滙水や長江が雨期に汎濫する其の汎濫水がそれであるのだ。此の汎濫水は昔からの困り者であって、此れを上手に治水し得れば人間は幸福になる。若しそれが出来なければ人間は非常な不幸に陥る。実に人間の吉凶禍福の根本問題であるのだ。それ故に治水については昔から生命をかけて工夫されたものである。

今日見る其の百瀆、三十六壩も三十六浦も網の目の様に張られて居るクリークも、つまりは長年に渉る治水の工夫の集結であるのだ。それなら此れ等の治水の道具は一体汎濫水に対してどんなに使はれるのであるかと云ふと、雨期に於ける汎濫する水の勢ひは実に大きいのであるが、其の汎濫する水を先ず流れに逆らはないでクリークに引き込むのである。すると一つの水流が先ず八つ裂きにされるのである。其の八つ裂きにした水を右に左に西に東にとクリークの湾曲を利用して引きずり回すのである。其の引きずり回す途中に沢山の湖沼や沢地があつて、時々其処で足踏みさせられる。そして又引きずり回される。而も其の水流の速度は極めて緩慢であるから、さすがの汎濫水も乱暴にならうとしても駄目なのだ。一度八つ裂きにしてクリークに引き込まれたが最後、水勢はダンダンに虚勢されて網の目を引きずり回され処々で足踏みまでさせられてる中に、全くおとなしくまるで骨抜きにされて終つて、トウトウ海口に流し出されるのである。其の巧妙なる実に驚くの外はないのであるが、其の上に尚意識的にか無意識的にか知らんが、湖沼や沢地の足踏みと緩慢なる流速とは太陽熱による蒸発作用に非常に便利を与へて居るのである。

此処に至つて中国の治水の巧妙は其の極致に到達して居ると云ふても敢へて過言ではあるまいと思ふのであるが、更に尚此のクリークが地を這ふ害虫の防波堤にもなつて居ることを考へるならば、誠に文字通りの錦上花を添ゆるものであると思ふて居る。害虫駆除は少なくともクリークによって取り囲まれて居る一区域を単位として一時に実行するならば、必ず有効であるとも考へられるのである。それは兎に角として、此の治水の方法が天災地変によって汎濫する飢民難民の群れ即ち流民の治民方法として転用されて居ることを思ふ時に、ウィットホーゲル等が中国の政治行政其の他に治水を云々して居る理由がヤヤ合点出来る様である。吾々を教へるものが非常に多い治水と治民、敢へて専門家の研究を待つ

や切なりである。

一九四六年一月二〇日

「的中した三つ」

中日事変が太平洋戦争に展開する前に、中国の習慣では一個人の事から一家族の事から一村一郷一鎮一県の問題から更に省と省との問題、遂に対外国の問題まで仲裁者を入れなければ断然解決しないと私は云ふた。それは、中日事変の解決に日本は第三者の介入を許さないと云ふて仲裁者を排斥して居る事の間違ひに対して私が是正を要求したのであるが、それは遂に採用されなかった。日本の無条件降伏後、中国では甚だ厄介なる国共の内戦が発生するに至った。中国人の間にも第三次大戦への展開を恐れる人があったが、重慶側延安側の何れの老朋友達も表面丈でなく楽観して居ったが、日本人の間では此れは誠に容易ならぬ米蘇〔ソ連を指す〕の前哨戦であると云ふ説がナカナカ熾んであった。私は多分日本人は内心の希望を米蘇戦へと繋いだものの様に私には思はれた。私は国共両軍の内戦は決して心配ない、必ず治まる、此れは丁度労資問題の協議に当って労工側が必ず爆竹を放って景気づけをして協議を有利に発展せしめ様とするのと全く軌を一にするものであるから、決して心配はいらない、近い中に治まると私の見透しを話して居ったのである。処が果せるかな、吾々の多数の希望的条件など其処のけとばかりに米国の駐華大使の交替と同時に新大使マーシャルは丸で立板に水の様に国共の間を仲裁した。戦闘中止の命令は双方から発せられた。一方政治協商はグングン進歩してトウトウ今日の新聞は、「協商会議両大成就」と云ふ大見出しに「憲草修改円満解決」「国府改組各方同意」と云ふ二つの中見出しに「政権機関確定為両院制」「省為自治単位省長民選」「政府党在国府占半数」と云ふ三つの小見出し(それでも初号活字である)で肩の荷を下ろした様な安心さを書いて居る。国民政府へは必ず共産党が割り込むに相違ない、イヤ次の政府は共産党が主体になるかも知れないなど漫談して居った処が、今日の新聞である。政府の半数を国民党が占めることになったと云ふのであるから半数を失ふことになるのだ。又省長を民選にするなど中国も此れからやと民主主義の国になるらしい。兎に角此れで三つの予言が三つ共的中したことになる。改めて書けば次の

イ 中国の事は仲裁者なしには解決せぬ

ロ 必ず共産党が政府に割り込んで来る

ハ 国共衝突は労働争議の労工側の爆竹だ

と云ふ三つである。私の中国に対する観察も相当なものであると云ふことが云へる。

一九四六年一月二六日

「自治会及代表委員会への希望」

吾々日本人は、今日迄何事によらずお上ばかりを頼りに生活して居りました為に、自治と云ふことについて何となく頼りなく思ふ習慣をもって居ります。其処で、折角出来た自治会も今日迄自らの責任と義務についてハッキリしたものがなかった様であります。こうした点から、自治会と一般との双方に信頼が欠けて居ったと思ひます。其の最もハッキリした現はれは、在留民一般が今尚何となく不安の心持ちで居ると云ふことであります。即ち此れを逆に申しますと、今日迄自治会は一般在留民に対して安心を与へ得なかったと云ふことが云へると思ふのであります。そこで、新しく選ばれた吾々代表委員は、先ず第一に、自治会と協力して在留一同に対して安心を与へると云ふことが成さねばならん事であると思ひます。仮へば真面目な勤労によって積み上げた一般の資産の擁護と云ふ様なことは、是非共完成せなければならんことであると思ひます。それ故に、自治会と吾々代表委員会とはお互ひに欠陥を補ひつつ力を合せなければならんものであると思ひます。私はコウした点から自治会と代表委員会とはどんなことを実行しなければならんかと云ふことを考へて見ました。

自治会と吾々代表委員とは、今後各地から集結する何万人かの同胞を受け入れつつ相互扶助の態勢を取って全同胞を安全に生活せしめると共に、本国へ送り帰らせる、これが一つの最も手近な重大な問題でありますことは、共済資産の募集とか帰国迄の宿舎問題とか乗船問題とか云ふ、つまり帰国処理問題に重点が置かれて居ることによってハッキリして居りますが、今一つ上海から離れて日本へ自然に移行して行く処の帰国後の問題であります。即ち吾々在外同胞がスッパダカで帰国した後に於ける民主的日本国民としての立脚点の確立と云ふこと、これが非常な問題でありますことは云ふ迄もないことではありますが、此の民主的日本国民としての立脚点の確立と云ふことは、実は其の踏み出しが今日にあると思ふのであります。現地と決して離れたものではなくて、誠に密接な関係があると思ふのであります。然し此の点について、今日迄は内地機関に対して実際に連絡がなかったのは云ふてもよいのではないかと思ひます。成程先遣員が上陸地その他にあつて色々な仕事をして居つては下さるのですが、先日お二人の方が帰られてのお話の中にも、私が只今申しました様な帰国後に於ける民主的日本国民としての立脚点の確立と云ふ点には未だ触れて居られない様でありました。東京に在外同胞援護会なるものがあつて、各府県に其の支部があつて、帰国上陸地に於いて一人一人に金百円宛ての見舞金を貰ふて居ることは周知の事実であります。それ故に此の在外同胞援護会なるものは文字通り吾々を援護して下さる機関であることは解ります。即ち此の援護会に対して吾々の自治会は今日迄何の連絡もなかったのであります。吾々が民主的日本国民としての立脚点の確立には、是非共此の援護会の協力を得なければならんと思ひます。そこで、今日以後あらゆる方法によって此の援護会へ吾々の自治会の血を通はせることをしなければならんと思ひます。それと共に、結成された各府県人会の人々は帰国の上各々の府県の援護会支部へ全員が出かけて、(毎船の人々が)之れにも血を通はせる様にすれば、必ず在外同胞援護会は非常に強力なものになると思ひます。海外から帰国する同胞は五百万乃至七百万人であり、これは大体に於いて日本総人口の七分乃至一割に近い多数であります。而も此の多数は岡目八目的に海外から日本を客観して居つた者であります。私の考へでは、吾々は其の思想に又實際の生活に日本内地の人々の先頭に立つべき資格者であると信じるものでありますから、一面に於いて在外同胞援護会を強化しつつ自ら今尚やや暗中模索的な生活をして居る内地同胞の進路に先頭を切るものにならねばならんと思ふのであります。此の二つの事が自治会と代表委員会とが互ひに協力して実現させなければならん双方の責任であると思へるものであります。皆さんが此の認識の上に立つて全力を挙げて御努力あらんことを希ふて止まないものであります。

一九四六年二月九日

「かすがい」

事変中に国共が衝突することが遂に中国をして敗戦せしめるであらうとは、吾々が度々聞かされたことである。然し私は何日も其れに反対した。戦争中には断じて衝突しない、仮へ一部に衝突があつても其の衝突が日本に有利となると云ふことは決して有り得ないと云ふたのであるが、其の通り重慶軍と新四軍と云ふものが時々江北の野から北方に於いて衝突したことがあつたが、其の衝突は其のままの姿で対日戦争は継続せられて、日本の為の一つとして有利なものは無かつたのである。そして日本の無条件降伏となつた頃から国共の間はただならぬ傾向を漸くあらはに見せて来た。日本軍隊の武装解除がナカナカ捗らぬ中に国共軍が北方でいよいよ衝突したと云ふことになった。蒙疆方面からは可成大きな電報が飛んで来た。イヤ満洲への重慶からの駐兵がまるで不可能となつた、満洲駐軍は全滅した、山海関を超へることは出来なくなった、津浦線は徐州以北全く不通になつた、上海線も常州無錫蘇州は已に新四軍の手中にはいつているのだと云ふ様な噂が飛ぶ丈でなく、新聞も大活字で高郵守を失ふとか塩城、東台占領せられると云ふ様な見出しを無遠慮に書き出した。この時実は一度停頓した国共協商会議が重慶に於いて再開されて、又停頓状態を呈している時であつたのである。

美国大使は突然として交替になったとか、満洲に於いてソ連と中国との交渉が円満に解決したとか云ふことが伝えられたのであるが、日本の官僚筋の観測は国共の合作は遂に根本的に不可能になったのである。国共軍の衝突は第三次世界大戦の前哨戦であると云ふ様な見方であった。然し重慶方面では解決可能と見て居った。延安方面も同様の見方であったが、必要なものは魯仲連であった。時に美大使の交替は誠に打ってつけの魯仲連となって遂に一先ず協商会議は成立したのである。時に蔣主席は九年振りの上海入りをして歓迎湧くが如き様である最中に、重慶に於いて協商会議の成功祝賀会が開かれた席上に於いて、暴漢が現はれて郭沫若、沈鈞儒等が殴打されたと云ふ電報が新聞を賑はすに至った。此れは実に不幸なる出来事である。漸く協商が成立したばかりの日に此の出来事である。何としても不幸な出来事である。沈鈞儒は直ちに上海に飛来して八仙橋の青年会館で此れが報告会を開いた。上海文化界も漸く動揺の色が見えて来た。張学良其の他の政治犯人の釈放が報じられ、聯合政府の中に毛沢東が立法院長として入るであらうと云ふことも報じられて来た。

今や中国政界は実に微妙な動きを見せて居る。日本に勝利した中国は未だ民主国としての憲法も出来て居らん、民主議会も出来ては居らんのである。中国も今から民主国家を建設しなければならんと云ふことである。日本は聯合国の指導の下に民主国家として甦生しなければならんことになって居る。然し内部には之れも亦た旧思想の潜在があるので、恐らく相当の苦悩があるであらうと思ふ。然し明治維新の混乱はあるまいと思ふ。今度は同じく一つの維新であり革命であるが、旧勢力の手から武器が取り去られて居るから流血を見ることはあるまいと思ふ。よしあったとしても極めて個人的な暗殺位のことであらうと思ふが、経済面に於ける全国民の苦悩は此れは恐らく想像の外であらうと思ふ。インフレはいよいよ浪を高ふして居る。食糧の不足は生産資材の不足に輪をかけて増産を妨げるであらう。中国もインフレであるが、日本の様な資源を持たん国とは比べることは出来ない。将来の両国の建設は共に誠に多事多難である。吾等の如く両脚に股がっての生活者は一層奮励する必要がある。而も大局を見誤ってはならん。注意の上にも注意して、何れに対しても其のかすがいとすべきものである事を忘れてはならん。

一九四六年二月一六日

「土台のある言葉」

読んだ本の中から面白い言葉を拾ひ集めて見ると云ふことを一寸考へついたのでやって見る。

「奴隷の主人が奴隷を殺しても世間は何とも云はないが、奴隷が其の主人を殺すと世間は騒ぎ立てる」(ラムゼ・マクドナルド)。此れは『議会と革命』と云ふ彼の名著の中に書いてある言葉である。東洋の言葉で「勝てば官軍負ければ之れ賊」と云ふ言葉が思ひ出される。

「余は為さねばならぬ故に余は為し得ると云ふのではなくて、余は為し得る故に余は為さねばならぬ」(ジャンマリ・ギヨー)。「優れた人とは思惟によると行為によるとを問はず、最もよく計画し且つ冒険する人である」(同じ)。此の二つの言葉は彼の著『義務と制裁なき道徳』の中にあるのである。「吾れありと思ふが故に吾あり」と云ふ言葉に似て居る。

「遂に彼の独特の社会的集団の主人となった人間は、之れと同時に自然の主人、彼等自身の主人——自由となる。」これはフリードリッヒ・エンゲルスの書いた『空想的及科学的社会主義』の終りに出て来る言葉である。今日の日本人は読んで味ふべき言葉であると思ふ。コウした言葉は従来非常に恐れられたのである。それは其の当時の日本の社会はコウした言葉がスグにも偉い力を持つべき欠陥を持って居ったからである。

「人間は独居する場合は、修養学識有る個人も群衆の一部となると直ちに本能に依って行動する野蛮人となる。」ギユスタヴ・ル・ボンの名著『群衆心理学』中の一句であるが、実に端的に人間を説明して居る。其の通りである。神と悪魔に同居して貰ふて居る人間のことである。神の働く様な時は静か

に読書したり冥想したりして居る様な時である。そうした時の人間はドンナ悪人でも乱暴な人間でも決して悪魔の跋扈は許さないのであるが、一度群衆の中に巻き込まれでもするとどんなに思慮のある人でも必ず其の群衆と同じ様に行動するものである。零は幾つ集めても零であるが、世の中の事物は決してそんなものではない。満洲の無際涯的な平野には日本の関東平野などでは味はふことの出来ない一種の力が身に迫る。それは群れると云ふことによって生ずる、個々の場合には見ることの出来ないものである。試験管の中でなら炎暑百三十度の日に立派に氷を造ることが出来る。イヤ製氷機はどんな赤道直下に於いてもドンドン氷を造って居る。然し、鴨緑江を松花江を製氷機と其の合理的な理論やで凍らせようとしても、極めて一部分を区切ってなら可能であるがアノままでは断じて出来ないのである。量は不可能を来らせると私は塵々注意して来たのである。

「人集まれば集合的心理を産む」とも彼は云ふて居る。実に其の通りである。必ずしも人だけのことではない。イヤ事物悉く然りである。何ぞ人のみ其のラチ外にあるべけんやである。群衆心理を発見した彼は実に偉い学者であると思ふ。コウした本を見て居るとは本の学者は偉くないとは云はないが、何だか一桁だけ違ひがある様に思はれる

「君主は善良なる性質を全部有つてゐる必要は無いが、之れを外面上有つてゐるが如くに装ふことは必要である。而して自己に都合のよき場合は善良に、必要の時には兇悪に變じ得ることが肝要である。何人も君主の外観を見るが、君主が實際如何なる人間であるかを知る者は少ない。そしてそれ等の少ない具眼者は多数者の意見に反抗することは出来ない」とはマキャベリズムの本人であるニコロ・マキャベリが其の『君主論』に於いて云ふて居る処である。私は又しても映画傀儡師を思ひ出すばかりでなく、マキャベリズムと云ふものがドンナものであるかと云ふことは、タダ此の數言を読んだだけでも頷けるものがある。言葉は実に面白いものである。特に偉い人の云ふ言葉は面白い。感ずるがままに拾ひ集めて見ていよいよ面白さが増して来る。柄にないことを考へ出すのは、私も一つ面白いことが云ふて見たいと思ふことである。然しそれは不可能である。ボアンカレーが云ふた「科学の為の科学」と云ふ言葉一つでも、この言葉を出す迄に至るには非常な努力と勉強が積まれて居るのである。私が持つて居るタッターつの「中国にや中国の尺がある」と云ふことでも、此れを云ふ迄には道楽ではあるが二十年の間ジツ見る時間が必要であつたのである。ダンテ・アリギェリが「故に行政官や君主は全国民の公僕たるべきものである」と其の『帝政論』に於いて結論する迄の彼の努力と勉強を思ふ時に、其の言葉の持つ力にはそれに相当する土台のあることをつくづくと感ずるのである。

一九四六年四月二〇日

「真理は普遍である」

今次大戦に於いて日本は徹底的な敗北をした。それはタダ殺人的な戦闘行為に於いてだけでなく、実に後方国民生活の面に於いても同じく其の生活は徹底的〔敗北〕であるのである。そして戦勝国側では、日本の軍国主義と帝国主義とは此の徹底敗北の原因であると指摘されて居るのである。日本が再び戦争をすることの無い様に此の誤まれる軍国主義と帝国主義を払拭させなければならんと云ふことから、日本の再建は民主主義の国でなければならん、平和主義に進まねばならんと、アメリカもソ連も中国も三方から民主主義教育を強いられて居る。然し、私は民主主義や平和主義を強えられることを決して不満には思はない、誠にありがたい事と思ふものである。なぜなら、私自身が已に日本の将来は民主的にして平和を目標としなければならんと考へて居るが故にである。然しアレだけ徹底的に軍国主義と帝国主義を強制されて来た今日でさへも、尚其の復興を企てて居る人々の少なくない人々によって日本の民主的な平和主義への転向は、日本人の手だけでは断じて出来ないことである。其処をアメリカやソ連や中国から強制して呉れるのであるから、実に願ふてもない幸ひであると思ふのである。然し逆に私の杞憂が一つある。それは、日本に民主主義・平和主義を強要するアメリカやソ連や中国の各々の本国

が軍国主義の抬頭を始めて居ると私の眼に映ることである。此れはナカナカ容易ならんことである。日本が軍国主義・帝国主義の為に世界の各国に迷惑をかけたことは事実である。

然し此の日本の軍国主義を帝国主義を打倒したものは何であったかと云ふことである。それは民主々義であったか平和主義であったかと云ふことは考へなければならん点であると私は思ふ。日本帝国主義を打倒したものが民主々義であったと云ふことは云へないことはないと思ふが、日本軍国主義を破ったものは平和主義であったとか平和思想であったとは私には考へられないのである。今次の大戦の原因は、日本だけではなく独乙も伊太利も等しく其の軍国主義的侵略思想であったことは、私は十分認めるものであるが、然し此れ等の主義思想を打ち破ったとするものは、決して平和主義でもなければ非侵略思想であるとは思はれないのである。

露骨に云へば、今日日本に対して強要したり強制したりして居る点から云ふと、矢張り軍国主義が勝ったのである。侵略思想が勝ったのであるとしか見へないのである。已に日本に民主々義を平和思想を強要して居るものはアメリカの軍人である。ソ連は未だ直接には何にもして居らん様であるが、中国が第一に派遣した人も亦軍人であるのだ。此れが私の杞憂になる点であるのだ。日本の敗戦が決定すると共に、アメリカにしても英国にしても中国にしてもソ連にしても、直ちに軍人ならざる人を送って日本の管理を始めたのであれば私の心配は無用であるのだが、表面上何と云ふとも実際には軍国主義の代表である、イヤ其のものである軍人によって反軍国主義を提唱したり他国に強要したりすることが矛盾であると云ふ位のことは各国ともに解らん筈はないと思ふが、然し吾が糞は臭くないと云ふこともあるから案外各国とも御存じない事かも知らんと思ふが、兎に角軍人によって平和が唱導せられるなんかは一寸猿芝居であると思ふ。

日本は実は維新以来幾度か此れと同じことを繰り返して来たのである。そしてトウトウ今度の様な事になったのである。日本軍国主義の頂点を極めたのは今次の大戦であったのである。それで吾々は十分軍国主義を改め平和思想を普及せしめなければならんと思ふて居るのであるが、アメリカにしてもソ連にしても中国にしても吾々程に平和を要求して居るであらうか。軍国主義の廃棄を考へて居るであらうか。私には疑ひなき能はずである。それは兎に角として民主々義を強要するアメリカの代表者が天皇を傀儡として居ったり、平和主義を唱導する同じ人が軍人であったりすることは、矛盾に違ひないと思ふ。此れが杞憂に終れば幸ひであるが、さらに各国の本国に於いて不知不識の中に軍国主義が蔓延したら、それこそ大変であると私は思ふものである。而も私の眼にうつる中国の色々を見る時に此の私の憂ひは決して取り越し苦勞ではない様である。アメリカのことは解らんが矢張り同じ様な色が見へるのである。中国は革命に際して勲章を持たなかつた国である。然し最近には勲章が出来て軍人は此れによって功を誇ることになる。タダ此の一事だけでも私の云ふ処は決して空言ではないと思ふ。兎に角心配なことは第三次世界大戦である。そしてそれは可能性が十分にある。それが終らねば軍国主義の絶滅は期せられないのではあるまいか。剣によって興った者は剣によって亡ぶと云ふことは必ずしも日本に対してのみ真理であるとは私には考へられないのである。

一九四六年四月二一日

「先憂後楽」

日本に自由思想が盛んになったのは何日頃からであるか私には解らんが、自由党と云ふ政党があったこと、其の首領が板垣退助であったこと、其の板垣が暴漢に襲撃された時に「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだことなどは、私がか子供の頃聞かされて感激したものであった。モウ古い話である。然し日本に自由が来たであらうか。成程自由党の主張は国会の開設となり立憲政治が樹立せられて、遂に自由党は解散して終った。それは日本が自由になって自由の主張の必要がなくなった為であらうか。イヤイヤ自由は遂に來なかつたのである。自由の主張の必要がなくなったのではないのだ。形式上に国会が開

設された立憲政治が樹立された。然し日本に自由は遂に来なかつたのである。それ処か日本の政治は年と共にダンダン封建へ封建へと逆行したのである。日本の文化を語る人々は此の点に注意する必要があると思ふ。日本政治の封建への逆行の頂点が今次事変前後の状態であるのだ。遂に全く逆転した日本政治は、民をして捩らしむべし知らしむ可らずの千年昔の中国の政治に迄逆行したのである。而も国民中一人の此れに反抗する者が出なかつたことは、何よりもハッキリと其の逆転道程を歩んできたことを物語って居ると思ふ。満洲事変以来の軍部の圧迫が如何に乱暴なものであり、如何に無茶なものであつたかと云ふことは、私が今さら云ふ迄もないことである。而も一人の板垣退助も現はれなかつたのである。

日露戦役の初めに当っては戸水寛人等七博士の強硬論もあつたが、反対に非戦論もナカナカ盛んであつた。唯物論者としては堺枯川とか幸徳秋水とかであり、基督教徒としては内村鑑三を始め木下尚江や安部磯雄などが勇敢に戦ふたものであるが、今次の事変から太平洋戦にかけて一人の内村鑑三も出なかつた。全基督教徒は易々として軍国主義の走狗となつて戦争を宣伝して歩いたのである。日本政治が封建への逆転の道をたどつて来たとなつた私が云ふ所以である。然しながら、時代の変化は一人の板垣も出ず一人の内村も出なかつたが、四人の異種の出で居ることは見逃すことの出来ないことである。野坂参三と鹿地亘夫妻と青山史夫がそれである。野坂は中国の赤都延安にあつて日本農工学校を設立して二百人に近き日本人を教育して居た。日本の降伏と同時に帰国して現に共産党の幹部として今次総選挙に立候補して見事に当選して居る。鹿地夫妻は桂林、昆明、重慶等の地に於いて日本人民反戦同盟を結んで日本の侵略戦争に終始反対の戦ひを為し、今まさに帰国の途上海に在つて便船を待つて居る。青山史夫は一足先に日本に帰つたが、彼は重慶に在つて国際印刷所を持つて非戦論を展開して居た様である。流石に日本が世界的強国となつて居た為、同じく反戦とか非戦とかであつても国内においてこそ一人の非戦論の出ることがなかつたが、国際的に真正面から敵中に入つて日本の侵略戦争に反対した人々があつたことは特筆大書すべきであると思ふ。而も野坂の学校の教育、鹿地の反戦同盟の設立は、実に遠大なる計画であつた。其の為多くの同志を持つて居ることは将来日本の建設の為に敬賀すべきことであると思ふ。

私は日本に遂に自由は来なくて反動的な封建が来たとなつた。そして一人の板垣一人の内村の出なかつたことに悲観した。然しながら、今私は野坂、鹿地等を得て大いに喜ぶものである。日本は大敗した、無条件の投降をした。然しながら、此れ等四人を得たことは日本の将来にとって非常に大きな収穫であつたと思ふ。私は一応悲観したのであるが、此処に於いて先の悲観を取り消して樂觀に立たんとするものである。而も其の樂觀せんとする中に一抹の尚悲哀の存することである。それは今度の四人が悉く唯物論者であつて一人の基督者の居ないことであるのだ。神よ許し給へ、一人の内村の出ざりしことを。遂に一人の愛と平和の使徒が吾が基督教界に居なかつたことは返す返すも残念なことであつた。此の点についてはタダ懺悔あるのみだ、嗚呼。

一九四六年四月二二日

「阿片患者」

数日来頻りに読書欲が抬頭して来たので、夜は更けるまで朝は早くから読む。然しモウ長いものは読めない。短いもので手取り早いものでないと駄目だ。丁度注文通りの本があつた。柳田泉編、春秋社発行の『世界名著解題』三冊がそれである。これはかつて円本盛んなりし頃一度出たことのある本である。然し其の時は見もしなかつたのであるが、一昨年になつて一度読んで見て大變面白かつた。其の時は大体文芸物の拾ひ読みをしたのであつたので、何だか一遍に文芸家になつた様にさへ思ふた。今度は社会思想や哲学方面のものを読んで見て居るのであるが実に面白い。世の中の人々が読書する筈だと思ふ。此の本の広告文には全三巻に圧縮された世界的一大図書館と書いて居る。成程そうとも云へる。僅かに三冊の中に約七百冊近い本の骨と筋が陳列してあるのである。老人の勉強本としては実に持つて来

いである。一頁か二頁で一冊の筋道が読めるのであるから調法此の上なしである。誰が読んでこんなに筋と骨とだけ抜き出して呉れたものか知らんが、長生きはせにゃならんとつくづくありがたく思ふた。

今日の日本人は一も戦争二も戦争三も戦争四も戦争で、士農工商悉くが戦争に瘦せて走り歩いて居るばかりか、学徒出陣だとか特攻隊だとか云ふ妙に青少年を駆り立てるらしい言葉をつかつて遂に学生の動員をして学校を空にして終ったから、コンナ調法な本でも読む人は少ないことであらうと思ふが、然し何としても私にはありがたい本である。世界中の名著と云はれる本が七百冊近くも集められて居るのであるから、どれを読んで見ても教へられる。試みに索引から借りて見よう。

「さ」の部は、始めが著者不明だが中国の三大奇書と云はれる『西遊記』だ。次が『桜の園』アントン・チェホフ、『狭衣物語』(不詳), サアタア・リザータス(トマス・カーライル), 『サッフオー』(アルフォンス・ドーデー), 『更級日記』(菅原孝標の女), 『サロメ』(オスカー・ワイルド), 『産業経済論』(アルフレッド・マーシャル), 『産業者問答』(サン・シモン), 『産業的及び社会的新世界』(フランソア・マリー・フーリエ), 『産業民主々義』(シドニー・ウェブ), 『三国史演義』(元の羅貫中), 『ザッフォ』(フランツ・グリル・バルツェル), 『ザラメア村長』(カルデロン), 『懺悔録』(アウレリウス・アウグスティヌス), 『懺悔録』(ジャン・ジック・ルソー) 以上である。一頁から四三頁の間に十六種の名著が集まって居るのであるから便利であるのだ。

「し」の部は大変である。アリストテレスの『詩学』を始めにして、『史記』『詩経』から『資治通鑑』は三冊共中国の名著である。日本物では『新古今集』や『心中天網島』に『神皇正統記』と『菅原伝授手習鑑』, 山鹿素行の『士道』などであるが、ゴーゴリの『死せる人々』を始めとして、『自然哲学の数学的原理』はニュートンの著書であり、カウツキーの『自然と社会に於ける増殖と進化』がある。ミルトンの『失樂園』, プレハノフ『史的一元論』, プハーリンの『史的唯物論』がある。ストリンドベリーの『死の舞踊』, ダムンチョの『死の勝利』, マルクスの『資本論』, アントンメンガーの『新国家論』, ダンテの『神曲』, マルクス, エンゲルスの『神聖家族』, ジェームスの『心理学』, カントの『実践理性批判』, ミルの『自由論』, マルサスの『人口の原理に関する一論』, パスカルの『随想録』其の他が並んで居る。どれも読み度い。読んで見ると悉く感心させられる。此くて現代人は立派な阿片吸引患者になって居ることがハッキリと私には診断される。

一九四六年四月二三日

「憂ひ百倍す」

紺屋白袴と云ふことを其のままに今日迄本屋の親爺本を読まないで来たのであるが、偶然のことから一寸手にした本の中に有名なるダンテの『帝政論』と云ふ抄訳本を読んだ処が、ナカナカ面白いことが書いてある。訳文の一部を借りて来る。「君主は最も人民の為を思ひ其の善ならんことを欲するのである。善良なる国家は自由を以て目的とし、其の人民は皆自己の自由の為に生きてある。人民は行政官の善の為に生きるのではなく又国民は其の君主の善の為に生きるのではなく、行政官こそ市民の善の為に君主こそ其の国民の善の為に生きなくてはならん。何となれば法律は国状に適する様に作られたものであって国状を法律にしたがはしめるものではない。又法の下に生きるものは立法者の命に服する意味ではなく彼等自らの為に生きることに他ならない。故に行政官や君主は全国民の公僕たるべきものである」と書いてある。面白いではないかと私が云ふたのでは値打ちがないかも知らんが、私には実に面白いのである。大体帝政国家と云ふことについても「世俗の帝政国家は普通に所謂帝国の意であって、世俗界の人々の上に君臨する唯一の君主の統治を謂ふ」と云ふて居るから、間違ひもなく君主帝国のことである。つまり日本帝国の如きを指して云ふて居るのである。其の君主帝国の君主の定義を前の様に説明して居るのである。君主は国民の善の為に生きるものであると云ひ君主は国民の公僕であると云ふて居る

のである。又法律についても国状を法律に遵はせるのではない。国民を立法者の命令に従はせるのではない。其の反対に、法律は国状に適合する様に作られて居るのである。国民は自らの為に生きるのであると云ふてゐるのである。私は本を読まなだったのでこんなことでも知らずに居ったのである。そして今日初めてこれを読んで、君主と国民との関係や法律と国民の関係について眼が開いたのである。而も此れ迄日本の教へが此うであつたら今日の様な運命にはならず済んだのではあるまいかと、帰らぬ愚痴までこぼさせられるのである。君主帝国であつても君主は国民の公僕であると云ふなら、君主は神にはならない筈である。君主は国民の善の為に生きるものであるなら、国民を霸道、戦争に駆り立てる様なことはなかつた筈である。誠に偏狹にして無知なる封建者流が握った権力に禍ひされて、遂に日本は剣によって興つて剣によって亡んだのである。

そして此の已に亡んで居る日本を未だ一国として存在して居るかの如き誤まてる盲目者流は、今日尚ほ此の敗戦の事実の認識を持って居らんのである。日本は已にアメリカの殖民地として取り扱はれて居るのである。日本の食糧欠乏は食糧を送つて来て或る程度まで救済して呉れる。日本の救済の為に其の工業材料もアメリカから持つて来て呉れる。其処で日本人は喜んで働くのである。そして其の労働に対して賃銀を支払つて呉れるのである。ところが出来上つた其の製品の販売となると、此れは国内の販売は一応日本商人の手にゆだねられるであらうが、外国に対する輸出となると此れは全部アメリカ商人の一手輸出となるのである。此れがつまり日本の死命を制するものであるのだ。つまり日本はアメリカの為に生かさず殺さずと云ふ政策によって搾られるのである。私の憂ひは此処にあるのである。君主帝国の実際さへも履き違へる様な日本人である。其の知識程度なるが故に、今又殖民地化されて居りながら其れを知ることが出来ないらしいのである。

日清戦争に勝ち日露戦争に勝ち北清事変に勝利し、日英同盟によつていよいよ一等国の折紙を自らつけて世界無比だなどと自惚れたのが最後であつたのだ。マンマと満洲をごまかし得たと自ら錯覚して尚ごまかしをつづけた結果が、ポツダム宣言の受諾で終止符となつたのである。敗戦とは国を挙げて奴隷となることなりと云ふことを認識するにあらざれば、日本の再建は不可能であるのだ。新日本は出来ないうであらう。私は今日『帝政論』を読んで其の日本の政治家のあまりにも幼稚なりし事実を知ると共に、今日の敗戦の認識があまりにも薄っぺらなるに憂ひまさに百倍するものがあるのである。

一九四六年四月一八日

「故国を思ふ」

人一倍に取りこし苦労性の吾々日本の一人として、流石ノントウ〔呑気父さんの略〕の私も日本の将来は一体どうなるのであらうかと云ふことを心配せずに居られなくなつたのである。日本の民主化と云ふことは、投降と共に七千万人の上に投げかけられた新しい目標である。然し、何十年に亘つて隅から隅まで行き届いた軍国主義が、ダンテの『帝政論』が赤面する様な徹底的な帝国主義が、師範学校を手先にして小学児童の末までイヤ最初からの教育が施されて居つたのである。仮ヘドンナに無条件の降伏をしたとは云へ、又仮ヘドンナ強力な圧迫を加へることが可能であるとしても、僅かに半年や一年で目標の一部分でも達せられる様なことは万々あり得ないことと私は思ふものである。

其の私の考へは大体に於いて今度の総選挙に於いてヤヤ鮮明に顕現して居ると思ふのである。何日も繰り返して云ふことだが、まず総選挙が何故に海外から帰国する復員兵士や引揚者の到着を待たないで実行されたのかと云ふ点に私の疑ひがある。全人口の約一割に相当する帰国者を何故に無視せなければならなかつたのであらうか。敗戦の苦しさを十二分に味ふてゐる者は内地の爆撃の戦災者もさることながら、私は先日一度江湾の戦俘の集中生活を実見して（国際基督教青年会の主催の慰問に加はつて私が民主的なお話をする約束で同行したのである）投降後已に八ヶ月を経過して居る今日、私の実見した人々は広西省桂林あたりから徒歩で上海へたどりつた一行と聞いたのであるが、其の顔色と其の服装を見

ただで私の胸は一パイになったのである。中国の人々が不思議に思ふて居る程今日も尚軍律が保たれて居る敗戦兵士の生活振りは、一見しただけで此の人々がモウ一度戦争に行けと命令されて再び銃を手にするであらうか。イヤイヤ銃は手にするかも知らんが、其の筒口は反対の方に向けられる様なことになるのではないかとさへ感じられたのである。私の直観は日本の民主化は恐らくは復員兵士からであらうと強く感じさせられた次第である。然しながら、此処にはっきりしておきたいことは、私の云ふ復員兵士とはホントに徴兵制度によって強制的に召集された、又無知なるが故に勇ましく召集に応じた、職業軍人にあらざる最大多数の二等兵一等兵上等兵などの下級兵士たちを云ふのである。

往復の途中で沢山に見た集中營さして奥地から重い足を引きづりつつとぼとぼと帰って来る同じ復員兵士を見て、私は涙止めあへなかったものである。而も新日本の基本になる者は此れ等の人々に違ひないと云ふ考へがいよいよハッキリとして来たのである。そして何故に此れ等の人々の帰国を無視して総選挙が実行せられたのであらうか、私の疑ひはいよいよ濃厚にならざるを得なかったのである。改選された当選代議士の色分けを見て私は余りにも杞憂的中したので、ガッカリすると共に腹立たしささへ覚へたのである。而も内閣側の非立憲的な態度にはタダあきれの外の次第、此れでも民主的な色が流れて居ると云へるのであらうか、何が民主だ何が新日本だと思はず机を打って憤慨さへしたのである。

戦犯者に対する懲罰はナカナカ嚴重である様だ。然し或る人の話に、今日の様なやり方では将来日本の禍にこそなれ、決して日本を民主化する助けにはならんであらう、自分の考へではまず第一に師範学校の全廃だ、国民学校教員の総追放だ、宗教家の総追放もやらねばダメだ。それから十年以前からの中央と地方の課長以上の役人は一応容疑者としてよい。軍隊の中でも職業的将校はこれも全部一応容疑者としてよいと思ふ。無論警察方面の人間も一応全部追出すべきである。まず此れ位のことから建て直さねばダメだと云ふたが、私も大体に於いて成程と感じた次第である。最近には文部大臣が新教育勅語を奏請したとかするとか云ふことが新聞に出たが、民主日本の教育の目標が君主から勅語として出されると云ふ様なことがあったら丸で反対ではないか。

此れ位の事さへも未だ解って居らるのであらうか。そんなに迄国民を馬鹿にしてもよいのであらうか。国民はそれ程迄も馬鹿にされても尚矢張り泣く子と地頭には勝てないとか、立寄らば大樹の陰とか長い者には巻かれよとか云ふて、誠に唾棄すべき奴隸的な服従を美徳として有り難がって居るであらうか。万一にも尚そんなことあったとしたら一体日本の将来はどうなるのであらうか、老人の寝言であらうか。イヤイヤ齧りつこうとした内閣がトウトウ倒壊したと云ふ新聞を見て、日本未だ亡びずと思ふと共にヤレヤレと一寸肩の荷をおろした様に思ふた。日本からの風の便りでは海外からの引揚者や復員軍人の頭は非常に旧思想であると云はれて居るが、然しそんな人間もあるとは思ふが、少なくともそれは甚だ多からざる人数であると思ふのである。大多数の人々はキット新日本の為に民主日本の為に一人一人は働ける人間であると私は確信するものである。其の確信が私をして総選挙を延期せよ然らざれば現地投票を認めよと打電したのである。而も総選挙は強行されたのであるが、未だ未だ民主日本の建設者たるべき代議士を得る為には一度や二度の解散があつてから後のことであらうと思ふのである。小刀細工や旧思想のカモフラージュに齷齪することなく、真に八面玲瓏硝子張りあくせくで堂々と民主々義はちめんれいろうを実行し平和思想の一点張りで進むべきである。其処にのみ生きる路があると信じて疑はないものである。

一九四六年四月二四日

「恋歌も淡泊だ」

百人一首が多く恋歌であると聞いて居るが、万葉集にも沢山の恋歌がある。昔のこうした歌に恋歌が多いのは何故であらうか。無論恋は本能であるが故に、如何なる時代と如何なる場合とを問はず本能は無遠慮に働くが故にと云ふこともあるが、私は昔はそれだけ世界が狭かったのであると思ふ。又人間の文化なるものがなかったのである。複雑なる文化が進んで来ると自然と本能の力が分散させられるので

ある。そうなると恋歌ばかりは歌はなくなるものである。裸体画にのみ満足を感じて居るのは、イヤ裸体に美観を満足させて居るのは本能である。世の中が文化的になると裸体や裸体画にのみ働いて居った本能が分散させられる。其処で本能の観賞がやや薄くなるものである。人間の趣味が豊かな人と貧弱な人とがある。文化的に動く人と本能的に働く人とがある。文化的の人ほど複雑である。本能的の人程単純である。生活が複雑な人程満足を多方面に求める為に自然と本能が弱くなる。此れに反して単純な人程満足を求める範囲が狭い。ややもするとそれは本能の満足にのみ陥る様である。貧乏子沢山と云はれる事などから考へて見ても、それは経済的原因からであつたり趣味が低級であつたりするとしても、兎に角貧乏人は本能的な満足を求める以外には満足を求めることが自由でない。自然色欲がさかんになる。自然子沢山になるのである。こんな事から考へると、昔の歌人が恋歌が多いのは当然の事である。今日のように文化が複雑になって居ると、恋歌以外に満足を得る道が沢山ある。少なくとも恋歌に全力を注ぐと云ふことが出来にくい。昔の人は恋と云ふ本能に全身全霊を投じられたから恋歌も自然熱烈であるが、今日の人はその点余程事情が違って居る。熱烈な恋歌が少ない、昔程にない所以である。

一九四六年四月二八日

「個人を發展せしめよ」

戦争犯罪者の軍事審判が甚だ出駄羅目であると云ふことを聞く。私はそうであらうと思ふ。何の不思議もないではないか。先方が勝ってるのだからの一語ではっきりして居るではないか。かつて日本軍が勝ってる時にどんな事をしたかと云ふことを考へて見れば極めて明瞭ではないか。今日戦犯者審判が出駄羅目であると云ふことは、何よりも立派な照魔鏡であると私は考へるものである。何れの国を問はず勝てば官軍となるワケであるのだ。負ければ賊軍と烙印を押されるのである。此の原則が変らない限り審判が公平になるとか真理とか合理とか云ふことは当分何の役にも立たないものと思ふ。一人の同文書院学生（彼は韓国人であるが、日本人として入学中学徒出陣で入隊した人間である）であつたと云ふ青年が、現地除隊をして昨日安慶から帰つて来た。同文書院の残務を何処かで扱ふては居らんであらうかと云ふて訪ねて来た。色々話をしたが、「日本は戦争に負けたが中国も矢張り負けたのである。韓国に至っては誠に可哀相であります。此れで各国共に自らの非を覚つたであらうと思ひます。現在の実情では、韓国は表門の狗を追い出したと思ふたら豚が裏門からはいつて来た」と云ふて居ります。日本が再起して呉れなければ東洋民族は全部奴隷にされます。中国人の間にも此れ迄考へる人があるでせうか。私共は断然日本も中国も韓国もない、東洋民族は一体となって再起せねばダメです」と真剣に語つて居つた。私も其の感を同じふするものである。此の青年の様な考へが三国の青年の間に必ずあると思ふ。そして、それ等の青年の一人一人と語るならば各自が感激するに相違ないと思ふのであるが、ここに一つ困つたことは、一人一人の場合はそうであるが、多勢で集まつた時にも矢張り一人一人の場合と同じ様に感激もするなら問題はないのであるが、人間は個々の人間の時の考へと多く集合した時の考へとは必ずしも一致しないと云ふ厄介があるのである。つまり、個人心理と群衆心理とは別々のものであることが甚だ多いのである。個々の青年としては中国も日本も韓国も従来に行きかきを棄てて、東洋人と云ふ立場から東洋を如何にするか東洋民族を如何にするかと云ふことを考へねばならんと主張するとしても、此れ等の人々が一度群衆の中にはいつたとなると其の時の群衆心理の動きが其の通りであれば問題はないのであるが、往々にして其の通りでない場合が多いのである。其処で個人的には誠に解つた人でありながら、群衆の一人となるや全く違つた意見を吐いたり賛成したりするのである。

此れが一番厄介なのである。戦犯者の審判などでもこうしたことが沢山あると思ふ。判決した判事自らが後から考へてアツまつたと思ふことが必ずあると思ふのである。個人心理と群衆心理と云ふものは多くの場合違つたものが動くと思ふことを知つてか知らないでか知らんが、日本は国民としての群衆心理を其のまま個人心理に強制したのである。日本では個人の考へは少しも許されなかつた。何でも彼

でも国民としてであった。国民とは集団である。集団には個人の場合とは別の集団心理（即ち群衆心理）が働くものである。其の集団心理を個人心理であると云ふ処まで強要したのである。日本人には個性と云ふものがない。日本人は徹頭徹尾国民であって個人ではなかった。それが軍閥が采配を揮ったものだから、簡単に軍国主義になって終わったのである。此れではいけないのである。今日云はれて居る民主主義日本に於いては、必ず個人としての日本人を発揮せなくてはならん。個人日本人が全日本人に欠けて居るのである。吾々が国民としてだけでなく個人心理と云ふものを自由に発展せしめることが出来たら、其の時日本は民主化したのである。それできれれば日本の民主化はあり得ないのである。

一九四六年四月二八日

「核心についてある」

綱島梁川は其の『支那倫理通論』の中で、中国民族と古代希臘民族との間に類似せる点のあることを次の様に書いて居る。「ギリシヤ民族も亦有名なる中庸的民族である。而して又現実的民族である。彼等ギリシヤ人の眼は空漠たる超自然の境に向かはないで常に自然現実の世界に注いだ。彼等の目的はこの世の幸福である、自己の保存発達である。而してこれやがて中国民族と通ずる特色ではないか。但しギリシヤ人は智に重きを置き中国人は意に重きを置く。後者は意志を以て感情の馳騁を裁し、ゆく所に中庸を見んとし、前者は知恵又は知見を以て一切の事の宜しきを見定めんとしたのである。知見の直観に重きを置いたゆゑギリシヤ人は流動多姿の趣を有し、意志の制裁に重きを置いたゆゑ中国人は固定不動の観を有して居る。彼は美術的で此れは道義的である。ギリシヤ人にありては道德其のものが美術的特色を有し、中国人にありては文学其のものが道德的特色を有してある」と書いてある。此れは甚だ面白いことである。又実に面白い見方である。特に最後の結論とも云ふべきギリシヤ人の道德が美術的特色であると云ふことについて、又中国の文学其のものが道德的特色を持つとは実に核をついて居ると思ふ。兎に角梁川先生は中国を漫遊したことも在留したこともある人とは思はないのであるが、而も尚かく全部とは云はんが核心をつく断定を下して居ることに、驚くと共に敬意を払ふものである。

一九四六年四月三〇日

「すなほに聞くべきだ」

「大道廢有仁義，知恵出有大偽，六親不和有孝慈，国家昏乱有忠臣」と云ふ原文は、武内博士によれば次の如くである。「大道廢れて仁義有り，知恵出でて大偽あり，六親和せずして孝慈あり，国家昏乱して忠臣あり」となっている。其の通りである。然しこれを逆に云ふと、「仁義の現はれしは大道の廢れたるに因る，大偽の出でしは知恵が生じたからである，孝慈の現はれしは六親の不和なるに因る，忠臣が出たのは国家が昏乱したからである」となるのである。そこで「秋風之辞」の中に「佳人を憶ふ」と云ふ一句がある。此の注がナカナカ面白い。最後の一句が「歡樂極まって哀情多し」で結ばれて居る通りに、此れは船遊びの時の詩である。即ち歡樂を極めて居る時である。コンナ時に佳人を憶ふと云ふたのである。文字通りに美人を思ふたに違ひないと思ふのであるが、注釈は「佳人を思ふとは忠臣を思ふと云ふ意である」と云ふのであるが、已に前にも書いたように佳人は文字通り美人のことに相違ない。天下太平の時の船遊びである。酒池肉林の觀樂境を出現せしめて居る時である。国家昏乱の時では毛頭ないのである。そんな時に忠臣孝子を思ふたり考へたりすることは断然ないと思ふ。忠臣の出づるは国家昏乱の時でなければならん。此の時国家は誠に天下太平であったのである。其の酒池肉林的觀樂境にあって忠臣を思ふたり孝子を見つけたりしたなら、恐らくはそれこそ夢であつたであらうと思ふのである。

一九四六年四月三〇日

「同じ得ざるもの」

中国民族の目は天に向かないで地に向かって居た、神に向けないで人に向けたのであると云ふ人がある。此の文句は実に甘い、然し神に向けないで人に向けたと云ふことは間違ひないが、天に向けないで地に向けたとは一寸考へられない。なぜなら中国人の天の思想はナカナカ透徹して居るのである。「かなわぬ時の神頼み」と云ふことは、人々が常にはどんなに偉そうなことを云ふて居ても最後のどたんばへ行くと無意識の中に神様に頼むものであることを指して云ふたことであるが、中国人の天の思想は確かにこれと同じことであると思ふ。中国人の天の思想については確か郭沫若先生も書いて居られた様に思ふが、梁川先生も「道の本原天にあり」と信じたからであると云はれて居る様に、道の本原は天からであるのだ。倫理も道德も其の根本を天に見て居るのである。

仮へば「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」と云ふて居る中にもある様に、中国人の目は天に向かって居るのである。地に向いたのは其の現象に向かったのであって、天に向かったのは質についての目であったのである。此の事は日本人がタダ一方にだけ向かって見たと云ふのはやはり日本的であるのだ。中国人は矢張り其の目を地に向けると共に天に向けて居たのである。そして其の地上に人の道を見て、それは天の姿其のままであると見たのである。或る天文学者が「右の目に天界の運行を眺めつつ左の目に顕微鏡をあてて電子の運動を見るならば、左右何れが何れであるか殆ど錯覚に陥るであらう」と云ふた人がある。中国人が「人は地に法り、地は天に法り」と云ふた言葉を其のままではないが、そして其の「天地は道に法って居るものである」と云ふて、其の「万物の持つ道こそは自然の法則である」と云ふて居る処を、吾々は間違ひなく考へなければならぬ。而も中国人が最後に発する「天曉得」[天のみぞ知る]の一語に決する其の態度は、何と云ふても動かすことの出来ない宗教の極致である。一切を神にゆだねる殉教者と軌を一つにするものである。それ故に、梁川先生が飽く迄其の目を天に向けないで地に向けたと云はれることに対しては同じ難いものである。無論天と云ふのはタダ見たままの天を指して居ること、高い処から見下ろして居る天と云ふやじるしだけのものであるとは思ふが、而も其の天にただ一つより無い処の生命の最後を賭けるいさぎよさに対しては、私は中国には殉教者はないと云ひながら而も絶対的讃辞を呈するにやぶさかならざるものである。即ち天に目を向けずして地に向けたと云ふ点に対して反対する所以である。

一九四六年四月三〇日

「中日事変の経過」

死兇の年を数へると云ふことがある。今日中日間の色々について考へることはまさに其の通りであるが、而も尚数へて見ないとカサ気〔瘡気、梅毒の気味のこと〕と自惚れの所在が解らないのである。其の始まりは民国二十年九月十八日、満洲事変勃発である。此れは誰でも知ってる様に柳条溝に於いて張学良の部下が満鉄線を爆破したと発表されて居る事件である。処が後に国際聯盟からの調査員の報告では柳条溝事件は日本軍閥の仕組んだ謀略であると断定して居る。

十一月七日 中華ソヴィエツト政府成立

十二月十五日 蔣介石下野 奉天省政府成立

民国二十一年

一月一日 蔣汪合作新国民政府成立

一月廿八日 上海事変勃発

此れは第一次上海事変であるが、この時なども確かに或る一部の謀略に煽動された人々に上海在留民は踊らされたのである。而も其の火つけは太鼓をドンドンたたいて歩いて居た日蓮宗の僧侶があつて、日本浪人の躍動が遂に事変へと引きづったことはありありと私には読まれる。而も此れも矢張り日本軍閥の仕組んだ一幕つぎ物であったのだ。

三月一日 満洲国の建国宣言
五月四日 上海事変停戦協定成立

実際に立会ったわけでもないから確実とは云へないが、此の停戦協定は英国公使の領事が仲裁して呉れて出来たのである。其の成立迄の経過を新聞で見ると何のことはない、仲裁者が丸で子供をあやして居る様な情勢である。やんちゃ息子をなだめつすかしつして協定を成立せしめた模様は、私をして矢張り日本人は未だ若いと云ふ感じをおこさせただけである。

民国二十二年

一月廿七日 第五次共産党討伐
三月十日 張学良下野
三月十六日 熱河討伐完了
四月六日 廢兩改元

これは従来大口取引に使用されて居った中国通貨として世界に認められて居ったテール即ち兩の通貨を廢止して元の通貨一本建に改めたのである。

五月廿六日 馮玉祥張家口にて拳兵
五月卅一日 塘沽停戦協定成立
十一月廿日 福建省共和国人民政府成立

民国二十三年

三月一日 満洲国帝政実施

此の時上海方面では日本の此の行動に対して非常な反感を持ったのである。中華民國の革命は滅満興漢であることは日本の明らかに知って居る処である。其の打倒目標であった又漸くにして目的を達し得たばかりの満洲政権の復活と云ふことであるので、日本は中国革命の敵であるとさへも云ふたものである。

民国二十四年

一月廿九日 有吉公使 鈴木武官と共に蔣汪両氏と正式会見、
二月十日 抗日排日貨停止命令、
五月三日 天津親日二新聞社長暗殺事件
五月四日 新生事件

これは上海に発生した下らん事件であったのであるが、上海陸戦隊が妙に大問題であると為して武器を引き出して力んだ結果、遂に雑誌の口絵に出た日本天皇の肖像を電柱に釘づけにしたと云ふ事件で、遂に友人郁華先生が高等法院の審判長となって陸戦隊の承認する判決を下したのであるが、其の後郁華審判長は暗殺された。彼は有名なる文学者郁達夫の兄である。

五月十七日 中日公使の昇格交換
六月十日 梅津、何応欽協定成立
六月十八日 土肥原、秦徳純協定成立
八月一日 共産党抗日救国宣言発表
十月廿五日 中ソ文化協会成立
十一月一日 六中全会で汪精衛氏狙撃されて行政院長兼外交部長辞職
十一月三日 幣制改革成る。

此の問題が実に大きなことであったのだ。即ちリースロスが応援団になって行はれたことであって、中国の兌換券は今日限り管理通貨となったのである。而も日本全国の不成功意見を全く裏切って見事に成功したのである。此の時高橋亀吉氏が来て日本人クラブ其の他で頻りに法幣が反故になるから早く安全な方法を講じるべしなんて下手な講演までしに来たものであるが、『東洋経済新報』を除いては此の

事についても日本の見通しは丸はずれであった。実は私の記憶では日本の対中国政策は一つも中ったものではなく全く丸はずれである。

十一月九日 中山兵曹暗殺事件、

此の事件に際しても早速上陸〔「シャンリク」は上海海軍特別陸戦隊の略称〕では戦車軽機重機等を持ち出しての大警戒やら通行遮断やらで大騒ぎした。

十一月廿五日 冀東防共自治委員会成立

十二月十一日 冀察政務委員会成立

十二月十五日 外交部次長唐有壬暗殺

これは実に日本側の新聞とか雑誌とか其の他の宣伝機関などでヒイキのヒキ倒しをした様なものであった。親日派とか知日派とか云ふて如何にも何か連絡でもあるか、少なくとも日本の為に特別の便宜でも計って居る様に書き立てたことが原因となつての暗殺であることは云ふまでもないことである。私としては友人の間柄であつた為に一層お気の毒に思ふた。

民国廿五年

一月廿一日 廣田三原則の発表

一方的な小刀細工の宣言なんか少しも響かなんだのである。タダ日本人の間でだけ問題になった。

五月十五日 中国派遣軍の兵力増強発表

五月十六日 北支の特殊貿易に関して対日抗議提出

五月廿九日 全国学生救国聯合会成立

六月一日 全国各界救国聯合会成立

六月七日 陳濟棠、李宗仁、白崇禧の西南軍抗日出師通電、

六月廿一日 茂益丸青島沖にて不法射撃

六月廿二日 大栄丸事件

七月三日 川越大使信任状捧呈

これが又馬鹿馬鹿しいことである。川越氏は天津の総領事であつたのを其のまま中国大使にしたのである。之では中国は頭から馬鹿にされた形である。

七月十日 萱生鑛作暗殺

七月廿六日 第一次豊台事件

八月廿四日 成都事件

此の事件は大毎〔大阪毎日〕の渡辺記者、上海毎日の某及び瀬戸某、其の他一名が成都の旅館に於いて暴徒の為に襲撃されて渡辺外一名上毎〔上海毎日〕記者が殺された事件である。

九月三日 広東省北海に於いて唯一の日本人であつた一商人が暗殺された

九月十七日 汕頭事件

九月十八日 第二次豊台事件

九月十九日 漢口日本租界に於ける日本警官射殺事件

九月廿三日 呉淞路海寧路口水兵暗殺事件

十月一日 中日経済開発協定成立

十月十七日 中日航空協定成立

十一月十六日 綏東事件交戦開始

十一月廿三日 七君子逮捕

十二月十二日 西安事件

これは西安に於いて叛乱せる張学良軍によって折柄滞在中の蒋介石主席が監禁された事件である。此の事件に対しても日本側の見通しは丸はずれであつた。

民国二十六年

四月十二日 北支那人不法監禁事件
 四月二十日 北支日本警察署襲撃事件,
 六月一日 中日飛行停止命令
 六月廿四日 抗日捏造記事事件
 七月七日 盧溝橋事件,
 七月八日 共産党参戦通告
 七月十九日 廬山会議
 七月廿九日 通州事件
 八月九日 大山大尉事件,

これは大山大尉が情況視察の為にルビコン飛行場方面へ出動中射殺されたのである。

八月十三日 第二次上海事変勃発
 八月廿七日 日本不拡大方針放棄

此処で丁度日本は中国の手に乗ったのである。此れまでの色々の事件は悉く此の不拡大方針を放棄させるべく行はれて居ったものである。今日それが放棄を知った中国側は万歳を唱へたであらうと思ふ。已に蔣介石は対日戦について「只怕蚕食，不怕鯨吞」と日本が万一蚕食主義で来たら困るが，若しも鯨吞即ち丸呑主義で来たら戦争は吾等のものだと云ふて居ったのである。最初の不拡大方針が遂に暴支膺懲となった。国民政府を相手とせず此れを飽く迄討滅すると共に新興政權の育成強化を図る米英仏ソの援蔣行為を排撃すると云ふ様なことでトウトウ大東亜戦争になったのであるが，イヤハヤ其の間の日本のとった態度なるものは実は誠に子供らしいの一語に尽きて居るのである。何日でも中国人が日本人は子供らしいと云ふがそれは実際であるのだ。ヤット云ふたら軽機重機を飛ばし戦車を引き出して通行禁止をして騒ぎ廻るのであるから中国側の人々から見て居たら何処まで子供らしいか底が解らんことであつたであらうと思ふのである。死んだ児の年を数へることも此処等で一寸ペンを擱いて後は又次のことにする。

一九四六年五月一日

「通貨戦は尚進行中だ」

インフレーションとデフレーションが上海では火花を散らして居ると私は云ふた。それを吉田政治氏は支那に於ける通貨戦と云ふて居る。そして『物価通貨民心—中国經濟のどろぼう』と云ふ著書の中で冒頭に掲げて居る。書かれて居ることはナカナカ興味のある事柄である。而も此れ通貨戦の勝敗の決定は中日戦争の勝敗が決定するものであると云ふて居るのは，最も正しい考へである。又此の通貨戦に敵性の存在と云ふことが非常に大きな影響を持つものであると云ふことも，流石に現地で苦勞した人だけのことはあると思ふた。民心が敵性である場合に於いては，日本の通貨戦は敗戦するに決まって居る。

私はかつて当局者が上海に於いて法幣を追放して儲備券一色の通貨を流通せしめ得たことは成功であると云ふ一語を聞いて，それは違ふ，それは戦争に於いて上海に於いては勝利して居る，つまり自分の占領地域内だけのことであるから，それは戦争の勝利がさせて居ることであると云ふたことがある。儲備券の成功ではなくて戦争の勝利に原因するものであるのだ。儲備券が成功したか不成功かと云ふことは，物価に対してどんなことになるか，民心が信用するかしないかがそれを決定するものであると私は考へたからである。物価は天井知らずのインフレを間違ひなくたどる一方，儲備券で月給その他の収入を持つ場合拒みはせんが，入手と共に右から左へ物を買って居る信用程度では成功して居るとは考へられないものである。一個三個の銅板即ち大洋一分であつた大餅，油条が今日壱千元して居るとしたら，実にそれは三十万倍と云ふことである。而も其の大きさが半分になって居るとしたら上下では実に六十

万倍と云ふことであるのだ。処が其の儲備券は已に整理されたのであって今日は全く法幣になって居るのであるが、今日の物価を此の基本的な大餅、油条や臭豆腐で見ると悉く一個は五十元である。これを儲備券的に計算して見ると、五十元を整理された一元対二百元で計算すると、先ず儲備券で壹萬元と云ふ数字が出る。其の壹萬元は戦前一分の大餅であったとすると実に壹百万倍の値上りになって居ることが解るのである。若し物の大きさが半分になって居るとしたら実は貳百万倍である。

儲備券のインフレーションは、二百元交換率によって一応精算された形になって正札の値段は安くなって居ようだが、それはタダ各自の懐ろが二百分の一に切り下げられたまでのことであって、物価としては依然としてインフレーションの鰻上りをやって居るものであると私は考へるものである。そこで敵偽鈔票の整理は結了したが、実は前門の狼を追ひ払ふだけのもので今日は後門の虎が追って居るのである。私が上海の通貨戦は尚進行中である、少なくとも結論までには尚研究の余地をのこして居るものであると云ふ所以である。著者吉田氏に今日の物価を聞かせたらどんなに驚くことであらうか。

一九四六年五月二日

「一つに名づけた二つの名だ」

「神の好む所は吾人之を好み、神の嫌ふ所は吾人之を嫌ふべし。かく為す時は吾人の心常に平らかにして、何等の憂苦も心に生ずることなかるべし」と云ふことが書いてある。此れは明らかに神の意志に服従するとか順応するとか云ふことに違ひない。此れは明らかにキリスト教の言葉であるが、其の云ふ処の神とは果して何であるのか。問題は此の神にかかっているのである。神はいますと云ふことは云はれて居るが、其の神は目にも見へない、耳にも聞へない、手にも触れられない。どうして神のいますことを知るのか。吾々の目に見、耳に聞き、手に触れ、身に受ける、自然界の朝から晩まで晩から朝迄の色々の千状万態の事柄は、如何なる人でも其の在ることを否定する者はあるまい。

其れ等の事柄は一体誰が何の為にどうして造り出して居るのであらうかと考へて見る迄もなく、其れは悉く自然界の現象であるのだ。其の自然界の現象は何によっておこるのであらうか。其れは自然界の法則によっておこるのである。雨の降るのも風の吹くのも決して人間の意志によっておこるのではない。悉く此れ自然界の法則によって雨も降り風も吹くのである。イヤそんなことを考へたり思ふたりして居る人間さへも、実は自然界の法則によって生れ出て居るものである。此の世の中に物として此の自然界の法則にあらでおこることは断然ないのである。而も此の法則なるものは、徹頭徹尾目にも見へず耳にも聞へず手にも脚にも身にも触れるものではないのである。何日からあるのか其の初めを知らない。何日迄あるのか其の終りはわからない。何処から何処までに行はれて居るものかそれも解らない。実に絶対にして唯一のものである。

此のものとキリスト教で云ふ神なるものとは同じものであるか違ったものであるかと云ふと、牧師達に云はせると其の自然の法則を作って此れを運営して居られるのが神であると云ふに決まって居るが、苟くも絶対なるものが何ものかによって造られて運営されて居るなんてことがあるものではない。それは唯だあるがままにあるものであって、此の絶対にして唯一なるものは意志もなく計画もなくただ自然の法則として動いて居るものであると云ふのが科学者の言ひ分である。此処に宗教と科学との考への相違がはっきりと見へる。私が考へるのに、此れは要するに矢張り一本の棒の両端になって居るものに外ならんと思ふのである。存在するものは断じて二つなき唯一の絶対である。此れを意志のある人格あるものとして説明する時に宗教となり、ただ自然の法則であると云ふ時に科学となるだけのものであって、然も宗教家も此れを証明する方法がない。科学も亦生命も意志もないと云ひはするが、主張することは出来ないのである。而も握って居るものは一つである。一は二を生じ二は三を生じ三は万物を生ずと云ふ言葉が其のまま此の場合にも通用するではないか。意志あり人格ありと見るが故に生ける神と名づけたのであり、意志もなく人格もないただあるがままに在るものであると見る時、唯一の法則と名づ

けられたに外ならんと私は思ふ。かくて、牧師宗教家によって宇宙に唯一の神として教へられてるものは、科学者が自然の法則と名づけて居るものと全く同じものであると私は信ずるものである。神は心を持って居る、意志を持って居る、生きて居ると云ふものは一体誰だ。

此くの如き声明をしたのは誰であるか。それはイエスである。神なんてあるものではない、宗教家が神だ生命だと云ふて居るものは自然の法則であると云ふて居るものは誰だと云ふと、それが科学者であるのだ。原始において人間は自然現象を崇拜した。それが進んで来て其れ等自然現象の奥に何かあると云ふことを考へる様になって、其処に心霊の存在を見出して此れが神様であるとなった。それが宗教であるのだ。処が科学者は在るものはタダ法則のみであると云ふのである。何れも決して嘘ではない、意志ありと見るから生ける神となる。意志なしと見るから科学の法則となるのである。間違ひはない、必然と見るから必然である。偶然と見るから偶然であるのだ。否定するから否定出来るのであり、肯定するから肯定出来るのである。然れば見る人によつての相違であつて断じて存在の相違ではないのだ。見る人によつての相違であるならば、神が人を造つた、人が神を造つたと云ふこともつまりは両端の見方である。何れが嘘で何れが真であると云ふのでもない。あるがままにある絶対にして唯一無二のあるものに対する、人間の二つの見方による二つの名である。神と法則がそれである。

一九四六年五月三日

「神と自然の法則」

「自然とは天然のままて人為の加はらぬ状態、自然とは人力では左右し得ぬ状態、自然とは造化の道又は力、自然とは天然性質、本性、天性、自然とは吾人の認識となつて外界に実在する一切の現象、自然的な見方に於ける一切の客体の総称、自然とは人類以外に存在する外界即ち自然物と自然力、自然とは精神以外の客体の総称と云ふ様に、自然についての説明が沢山ある。中国語ではどんな説明があるかを見ると、自然とは本来のままなる天然自然、自然とは無理がない、癖がない、自然とは当然なる、其の通りなると云ふ様な説明である。そして、一つ自然と云ふ字を冠して自然法と云ふことがある。此れは、「自然法—自然界の一切の事柄を支配する原因結果の普遍的必然的法則」と云ふことが書いてある。此れが私の問題であるのだ。此処に云ふ自然法即ち自然の法則とはそもそも何かと云ふことである。それは目に見ることが出来るのか、耳に聞くことが出来るのか、手に触れることが出来るのかと云ふと、それは断じて出来ないものであるばかりでなく、それは実に人力では左右し得ぬものであるのだ。ただ在るがままに在るあるものであるのだと云ふより云ふことさへも出来ないものである。宗教家は宇宙間にタダ一つの神が在すと云ふ。其の神は目にも見へず耳にも聞へず手にも触れないものであるが、意志を持つ人格的のものであつて宇宙を支配して居られ宇宙を運行して居られると云ふのである。云ふ人は、一方は所謂科学者であり一方は宗教家である。科学者の云ふ処に間違ひがあるか、それは決して間違つては居らん。宗教家の説く処に間違ひがあるか、これも間違つてはおらん。それなら何れが是で何れが非であるのだ。何れも是であつて何れも非であるのか。イヤイヤ是非の問題ではないのだ。科学者が云ふ自然の法則も宇宙間に唯一無二の存在である。宗教家の云ふ神様も宇宙間唯一無二の存在であるのだ。科学者の云ふ自然の法則は宇宙の千状万態を顕現して居るものである。森羅万象悉く此れによつて顕現して居るものは無いのである。宗教家の云ふ神様は宇宙の支配者であり、宇宙万物の造主であり、其の運営者であると云ふのだ。一体宇宙間には全く同じものが二つ存在するのであろうか。宗教家に云はせると、自然の法則と神様とは違ふ、自然の法則を造つて下さつたのが神様であると云ふ。科学者に云はせると、そんなことは断じて無い、それは宗教家がバベルの塔を築いて居るのだ、自然の法則と云ふたのではありがたくないから其の自然の法則の上にそれを造つた神が在しますと云ふて居るのだ。

若しも神が其の上に在すと云ふなら、其の神様はどうして存在するのだ。其の神様は誰が造つたのだ

と云ふことが云はれる。そしてそれに対しては、神様は超自然であると答へるより外に答へは出来ないであらう。然し宇宙間に超自然と云ふ様なことが有り得るであらうか。言葉として文字としては何とでも云へる、又書けるが、宇宙間に自然以外に超自然の存在と云ふ様なものがどうして存在するのであらうか。已に自然とは人類以外に存在する外界即ち自然物と自然力と云ひ、精神以外の客体の総称と云ひ、又吾人の認識となって外界に実在する一切の現象自然的な見方に於ける一切の客体の総称と云ふて居るのである。一切の客体以外に超自然的存在なんて云ふのは要するに詭弁に過ぎないものであって、近代科学による神観はつまり此の自然の法則こそ神と云ふて居るものであるのだと云ふことである。私は此の説に賛成する。私は自然の法則と唱へて居るものこそ吾々が神と云ふて居るものであると信じて疑はないものである。自然の法則と云ふても神様と云ふても、つまりは一つの在りて在る存在に対してつけた二つの名に過ぎないものである。

一九四六年五月三日

「強いと云ふこと」

「神、人を男女に造り給へり」と『創世記』に書いてある。男も女も共に神によって造られたものである、そして、女は男のあばら骨を一本抜き出して造られたとも書いてある。夫唱婦隨であるとも云ふ。男が能動的で女は受動的であるとか、男は動的であって女は静的であるとも云ふ。そして、誰でも男が強くて女が弱いと考へて居る。恐らく男も女もそうと思ふて居る。最早男女の相場は決定的のものであると無意識の間に決定して居る様である。然し私は私の過去に〔ついて〕考へて見て、又時々会ふ他人の場合に思ひ合はせて見るに、男が女に比べて強いと云ふのは体力イヤ腕力のことであって、心の方面になると必ずしもそうとは云はれない。

体力に於いても亦た必ずしも女が弱いと云ふことは云はれない様である。私の家内は肉体的には後には病の為に弱くなったが、然し彼が若かりし頃内山書店を開いた頃の彼の働きを考へて見るのに、私にはとても出来ない働きを一人でやって居った。そしてイザという時になると、何日も彼の方が落ちついて居って私の方があわてて居った。どうもこの点は何と云ふても私が負けて居った。家内が亡くなってから寿美ちゃんと二人で住まわって居った時のことを考へて見ても、年の若い寿美ちゃんの方が私よりも遥かに強い点があった。今現に結婚してから後の寿美ちゃんを見て居ると、腕力に於いては恐らくそれは、但し瞬間的腕力への力の結集に於いてであるが〔私の方が〕強いが、時間的に継続すると云ふ点になると矢張り寿美ちゃんの方が強い。而も其の心の面になると丸で問題でない。寿美ちゃんがアノ手術に如何なる態度で堪へて来たかと云ふことは、タダに心だけのことではない。特に朝起きの出来ない様な肉体が強いなんて云へるものではない。私は私自分の身体について今日も決して人並以下に弱いとは思はない、イヤ相当に自信を持ってゐるが、而もみきに対してさへも自分の方が弱かつたと思ふて居る。寿美ちゃんに比べても私の方が強いと云ふ自信はない。毅さんの身体は見た目には強そうだが、決して寿美ちゃんに比べて強いものであるとは思はれない。塚本夫妻を見て居っても同じことである。決して塚本君が強いのではない。美代さんの方が遥かに強い。それは現在の社会組織がイヤ慣習が男を表面的にたてて居るが故に、それは生理的關係もあるが兎に角男が如何にも積極的であり男の方が強い様に見へるだけであって、実は決してそう優劣のあるものではない。寧ろ女の方が実際には強いものであると云ふ事が云へる。

今朝「大愚良寛」を読んでつくづくと考へさせられるものを見出した。それは良寛と貞心尼とが応酬した歌に十分現れて居る。特に歌の中で「いづこへも立ちてし行かむあすよりは、からすてふ名を人のつくれば」と良寛が詠んだ時に、貞心尼が「山がらす里にゆかば子がらすも、誘いて行け羽よわくとも」と返して居る。すると流石の良寛が甚だしく弱音を吐いて居るのが面白い。

「いざなひて行かば行かめど人の見て、あやしめ見らばいかにしてまし」と云ふて居る処、実に男の

弱さが其の信念が疑はれる程である。貞心尼が「鳶は鳶雀は雀さぎはさぎ、鳥は鳥何かあやしき」と返して居る。此の歌の強さに胸のすく様な思ひである。私は「宿かさぬ人のつらさを情にて、おほろ月夜の花の下ふし」と云ふ蓮月尼の歌に、全く面にくく思ふ程の感じを以て頭を下げて居るものであるが、今又貞心尼の此の歌に同じ様な感じを以て頭を下げるものである。「鳶は鳶雀は雀さぎはさぎ、鳥は鳥何かあやしき」、此れでは良寛和尚もべしやんこである。男は決して強いと断定出来るものではないと思ふ。女の実力は決して男に比べて弱いものではない。新日本の建設にあたって小学校の教育を女教員に託すと云ふことである。此れは当然の事である。女の手でやれる、必ず成し遂げるにきまつて居る。女よ遠慮するでない、無遠慮に働け。男は必ずしも強いものではない。特に真理の探求に於いては私は反って女の方が強いと信ずるものである。今朝は貞心尼の胸のすく様な一首に引きずられてこの漫談を書いた。

一九四六年五月五日

「三省の要」

其の隆盛を誇りしも僅かに半世紀にして剣によって興った日本帝国は、又剣によって敗れたのである。此れはどうすることも出来ない事実である。そして、早くも日本は再び戦争を企てる様なことのない様に、平和を翹望する民主々義の国としてのみ再興せよと戦勝国から厳しい命令と監督を受けて、今まさに四個国の管理に入らんとして居るのである。然しながら、今日迄の日本を造る為には、あらゆる面に於いて軍国主義がうゑつけられて居るのだ。帝国主義が教へられて来て居るのだ。侵略主義が潜在して居るのだ。此れ等のものを今一朝にして払拭することは数ヶ月や一年のよくする処ではないのだ。論より証拠、投降後初めての日本の総選挙は頗る満足であると声明せられたとたんに、五月一日にはマ元帥暗殺の陰謀が発表されたのである。而も其の満足であると云ふ声明にも拘らず、実は甚だ非民主的な代議士の当選が多いのは此れ又事実である。然ればこそ後継内閣の組織の困難なる、未曾有の組閣遅延は何よりの鉄証である。飢へた人間を前にして政権に嚙りつかんとする醜さ、日本民主化が尚遙かに彼方にあることは間違いのないことである。然しながら仮へ如何に遠き彼方にあるとも、日本は民主化するにあらざれば、自由と平和の民族になるにあらざれば、再び起つことは出来ないのである。

吾々は此のことははっきりと記憶しなければならぬ。日本の民主化について今日迄の新聞や雑誌の記事を見て居ると、何だか奥歯に物がはさまつて居るきらいがある。それには日本帝国の破綻の原因が何処にあったかと云ふことを先ず知らせる必要があるのだ。静かに私達は考へねばならぬことは、日本の帝国主義なるものは元来日本に発生したのではなくて外国にならうたものであることなのだ。其の憲法も国会も悉く舶来品であるのだ。特に帝国としての統治は範を独乙にとつたことは云ふまでもないことである。ここで私は『帝政論』一篇を読んで見る必要があると思ふ。本家で云ふ処の帝政国家とは一体どんなものであるかと云ふことである。誰かの『帝政論』に「君主は最も人民の為を思ひ、其の善ならんことを欲するものである」と云ふことがある。此の文句について日本帝国には間違いはなかったであらうか。「善良なる国家は自由を以て目的とし、其の人民は皆自己の自由の為に生きてゐる」と云ふことについては、残念ながら政治する者の罪かせられる人民の愚かさから知らんが、日本人民の實際生活は一つに政治の奴隷であつたのである。はっきりと云ふことが出来る。日本人は自由と云ふことを知らない。又同時に奴隷とはどんな人間を云ふのかと云ふことも知らないのである。私が此れに使ふ奴隷と云ふ意味は自己の意志によって行動する人間は自由人であるが、他の意志によって行動する人間は奴隷であると云ふ点から云ふのである。「人民は行政官の善の為に生きるにあらず、又国民は其の君主の善の為に生きるものにもあらず」と云ふ言葉の中に、人民の立場はチャンと規定されて居る。そして「行政官こそ市民の善の為に生きなくてはならぬ。君主こそ其の国民の善の為に生きなければならぬ」と行政官や君主の立場がはっきりと示されてゐるのだ。何となれば法律は国状に適するように作ら

れたものであって、国状を法律に遵はしめんとするものではない。其の通りである。法律の為に国が存在するのではない。国の為に法律は作られたものである。人民は法律の為に生活するのではない。人民の生活安定の為に法律は作られたのであるのだ。故に又、「法の下に生きるものは立法者の命令に服する意味ではない。彼等自らの為に生きること以外に外ならないのである」と人民が生きてる為の法であることも示されて居るのであるが、此れ等の点に於いて日本の考へは脱線して居た。それは已に指摘した様に日本国民の愚かさからと思ふが、為政者の為にろうらくされてしまったのである。此れ等の定義が全く反対になって居るのである。故に「行政官や君主は全国民の公僕たるべきものである」と云ふて居るのであるが、日本は此れも全く逆になって居るのである。色々の勝手な理屈をつけて本家が定義して居る帝政論をメチャメチャに改変したのである。君主は法を立つるに当りて自己に命ぜられた目的の為に掣肘せられることは明らかである。斯くして「君主政治の下に於いて人類は初めて自由なるべく、君主政治は世界の福祉の為に必要である」と云ふて居る。日本帝国主義は此の通りに進んでさへ居たら今日のようなことにならなんだ筈である。然るに此の根本的な定義を忘れて天皇は神聖にして犯す可からずと云ふ様なとんでもないことを規定したり、遂に天皇は現人神であるなんてお伽噺を其のまま政治にもって来たりして、国民の愚かさをよいことにした結果が逆にポツダム宣言を無条件に受諾せねばならんことになったのである。然るに尙未練にも、イヤ国民をごまかす為に国体の護持だとか天皇制の存続だとか云ふ様な国民を愚かにすることのみ考へて、遂に天皇をして傀儡人形にして終ったのである。

今日の日本の天皇の一々の行動は昔日の天皇ではあり得ないのである。一にもマ元帥、二にもマ元帥と云ふて一つとして単独の行動は許されて居ないのである。天皇の勅語さへもマ元帥の許しなくしては一言も発せられることはないのである。此れが傀儡人形でなくて何が傀儡人形だ。私達は気をつけた上にも気をつけねばならん。此迄吾が天皇を愚弄される立場に於いたのは誰だ。イヤそれはどうしたわけだ。つまり国民の愚と為政者の無知が然らしめて居るのである。私は思ふ。こんなはっきりしたことさへも解らん様な国民にどうして民主々義なんてものが解るべき筈がない。然しながら、日本は民主化するより外に立つべき道はないのである。民主々義とは一体何だ。民主々義国家の進むべき道はどんな道か。私達は其の道だけでも早く見つけ出さねばならんと思ふ。「民主国とは直接間接に国民によって選挙せられた国民の代表機関が国民の名に於いて統治する政体であって、此れが民主政体の最も普通の形式である」と説明がある。つづいて「国民の代表機関としては合議制と独裁制との二つがある。合議制は議会、独裁制は大統領である。大統領の場合は一見君主国に似て居るが、然し実は大統領も直接または間接に国民によって選挙せられ法律上国民を代表して居るものである。従つて其の機能は本来国民に属してゐるものである。大統領は国民の名に於いてのみ之を執行してゐるのである。又君主国にあつては君主は世襲であるが、民主国にあつては大統領は直接間接国民の中から選挙せられ一定の任期を有してゐるので主権はすべて国民の手中にあり、統治権を総攬するものも亦た国民の代表機関である。即ち民主国とは人民による人民の為の政治様式を有する国のことである。」此れ丈のことを読めば民主々義への道がどう云ふことであるかははっきりすると思ふ。次に自由とか平和とか云ふことについて考へて見ると、これ又日本にはタダ看板だけのものよりなかつたので、全く自由の何もの、平和の何ものと云ふことが解つてゐない。今日突然として自由が与へられたが実は其の文字だけが解つたので、其の内容は丁度奴隷が解放されて自由が与へられたのと同じである。反つて奴隷の方が心配もなく楽であつたと云ふたのを彷彿として居るのであるから、先ず民主々義と云ふことを先決問題として邁進すべきである。自由と云ふことには自主自治の人間でなければ解らないと云ふことを考へるべきであるとして、一先ずペンを擱く

一九四六年五月七日

「稀代の珍品」

千載の一遇とか一期一会とか云ふことが云はれるが、それは一体何日のことであらうか。而も私の千載一遇と他の人々の千載一遇とは別々の時であらうか、それとも同時に来るものであらうか。一期一会は只一人に別々に来るものか、一時に来るものであらうかなど考へることも時にはある。「今日と云ふ今日は未来永劫に再び来ることのないものである」と云ふことが思ひ合はされる。今日と云ふ日が未来永劫再び来ることがないとすれば、それこそ千載一遇であり一期一会ではあるまいか。そして其の千載一遇も一期一会も決して吾人一人一人に別々の時でなくて、実に自他平等に与へられるものであることが解る。人間として平等に今日も昨日も又明日も与へられるのである。「神は善きものにも善からざる者にも雨を均しく降らし給ふ」と云ふことがある。同じことである。天に二日無し神に二心なしとか。此くて吾々は毎日千載一遇に一期一会しつつあるのである。昨日は紅顔の美少年、今日は半死の白頭翁となる。ホントウだ。此れは人間悉く一人もれなく自他平等の状態である。此れを思へば今と云ふ時も亦た未来永劫に再び来ることなき一期一会である。一寸の光陰も空しく過ごしてはならんと云ふ氣がする。カーライルが云ふたとか、「青き東の空に太陽出で、新しき此の日は生まれり。限りなき永世より来りたる此の日は夜至れば元の永世に帰り去る。汝の一生涯中決して再び新しき此の日に逢ふことを得ず。之を思へば汝はこの日を無用に脱せしむべからず」と云ふことばである。ホントウである。名画二枚無し、故に尊し。何によらず沢山あるものは賞でられることがない。数の少なきことは人々に賞でられる一つの原因である。這の間の消息は人間生活の随処に見られることである。稀代の珍品とは何のことか。他に見ることの出来ないタッターつより無いものにつけられるのである。稀代の珍品、又無き物こそ稀代の珍品である。昨日も今日も明日も同じ時であると考えが故に雑品扱ひをするのである。昨日は昨日であり今日は今日である。又明日は明日である。断じて同じ時にあらず、同じ日にあらずと考へる時に今日は誠に稀代の珍品である。昨日も明日も亦此れ稀代の珍品である。故に価値高き時であるのだ。而も其の珍品は自他平等に与へられて居るのである。空しく逃してはならん。吾等は此の貴き時を最も有効に使ふべきである。

千載一遇は時々刻々にめぐり来て居るのである。一秒といへども間隙はないのである。特別に旗印たてて今日こそ汝の千載一遇であるぞ、此の時こそ一期一会であると云ふて来るのではないのだ。吾等の千載一遇は時々刻々に来て居るのである。此れを千載一遇として受けるか受けないかは吾等の考へである。空しく過ごすも有益に使ふも亦吾等の考へによるのである。雑品たらしめるも稀代の珍品たらしめるも悉く此れ吾等の考への如何にかかって居るのである。而もそれは万人悉く同じことであるのだとは云へ、それは人間としての時に対する考へであるが、不思議なるは吾々の一人一人が其の同じ時に決して同じことはして居らんのである。此れに考へさせられるものがある。千載一遇は一期一会は自他平等に与へられては居るが、其の時自他の考へから行為行動は決して平等にではなく、実にそれこそ別々になって居るのである。吾の考へる処、吾の行為する事、吾の行動は甲乙丙丁の人々と必ず同じきことではなく、全く各々独特のことを考へ、各々独特の行為を行動して居るのである。それこそ吾等の一人一人が稀代の珍品を造りつつあるのである。貴からずや、吾等一人一人の考慮も行為も行動も悉く之稀代の珍品であるのだ。いよいよ今日を只今を怠惰に逸楽に過ごしてはならん。

一九四六年五月八日

「詩も歌も好きだ」

詩歌は人間感情の最高の表現であると何かに書いてあったと思ふ。果して最高の表現であるかないか知らんが、感情の表現された詩歌には優れたものがあるのは間違ひない。

君故郷より来たる、応に故郷の事を知るべし

来たる日綺窓の前、寒梅花をつけしやいなや

とは王維の詩であるが、郷里から訪ねて来た人に寒梅が開いたかどうかと問ふた詩である。主客対座して物語る様がありありと私の眼に映る。

牀前月光明らかなり、疑ふらくは是れ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思ふ

詩聖李白の詩だ。三更に眠りから醒めた李白が床の上に頭を上げて、明月を窓外に眺めて居る様が映画の様にあらはれる。だから詩歌は人間思情の最高の表現であると云ふたのであらうと思ふ。

成程これ等二つの様な詩歌ばかりなら最高の表現と云ふてもよいが、然し多くの駄作に至っては必ずしも最高と云ふことは出来ない。王維とか李白と交はった阿倍仲麻呂の幸福なりし生涯がつくづくと思ひ出される。イヤ彼の得意なる生活の様が又ありありと私の眼に幻の様に見へる。

蒼々たる竹林寺 杳々たる鐘声の晚れ
荷笠斜陽を帯び 青山独り帰ること遠し

これは劉長卿が、僧靈澈が竹林寺に帰るのを見送ってる詩であるが、遥かに遠く青山に竹林寺が隠見して居る。一人の僧が一步一步別れて行く。一人の人が手をかざしてそれを飽かず打ち眺めて居る。静寂を破って寺の鐘がガーンガーンと哀愁をそそる様に聞えて来る。何と云ふ詩境であらうか。これ詩が詩境を描き出すのか、こんな境地が詩を為さしめたのか。詩は思情の最高表現であると云ふ言葉は、又しても私を迷はせるにも拘らず、私は詩は好きである。或ひは詩は私を底知れぬ沼に引きずり込むのではないかとも思ふが、然し仮へ引きずり込まれてもよい、私は詩は好きだ歌も好きだ。

一九四六年五月九日

「思ひ出ずるままに」

数日来何となく詩が読みたくなったので唐詩三百を手にして見る。

寥落たり古の行宮、宮花寂寞として紅なり

白頭の宮女在り、間座して玄宗を説く

読むにつれて何となく私自らが玄宗の離宮の廢墟にあるが如くである。待てよ、日本にも何だか似た味の詩があったぞ、と考へるとあるある。

古陵の松柏天飈にそびゆ、山寺春をたずねて春寂寥

眉雪の老僧時に掃くことをやめ、落花ふかき処に南朝を語る

何とよく似た後味ではある。人間の共通性を拒むことは出来ないものだとつくづく思ふ。

青山隠々として水迢々たり、秋つきて江南草未だ凋まず

二十四橋明月の夜、玉人何れの処にか吹簫を教ふる

揚州の水郷が目に見えて来る。詩は現実だよと教へて呉れた友人が何日もありがたくなる。「潮来でじまのまこもの中に、あやめ咲くとはしほらしや」と云ふ歌の味がする。揚州は二十四橋と云ふに対して潮来十二橋と云ふとか。

回楽峰前沙雪に似たり、受降城外月霜の如し

知らず何れの処か廬管を吹く、一夜征人ことごとく郷を望む

砂漠をのぞんで聳へ立つ回楽峰と塞外に近く城に囲まれた受降城とが目に見える。何処からともなく胡笳の哀音が風に送られて聞えて来る。多くの兵士たちが皆望郷の念を燃やしたと云ふのであらう。「牀前明月の光、疑ふらくは是れ地上の霜かと、頭をあげて明月を望み、頭をたれて故郷を思ふ」と云ふ李白の詩が思ひ出された。他郷に在る者として秋夜月に対して故国を思ふ。誠に今昔の差はない。意味は違ふが「山川の草木うたた荒涼たり、十里風は腥き新戰場征馬すすまず人は語らず金州城外の斜陽に立つ」と云ふのが思ひ出された。「季布に二諾なく、侯嬴一言を重ず、人生意気に感じ巧妙誰か復た論ぜん」と云ふ詩の中の一部の文句が思ひ出された。そして子供の頃から教へられた「武士に二言なし

男子の一言金鉄の如し、人生意気に感ず功名誰か復た論ぜん」と云ふ文句が思ひ浮んで来た。前の二つの文句どうやら作り替への様であるが、後の二句は其のままが使はれて居る。而も此れ等の言葉は日本独特の言葉かと思ふて居ったのが、此処に至ってダアとなったのである。こんなこと拾ふて居たら遂にどうなるか解らんから此処等でもう一寸メ切りにする。

一九四六年五月十日

「盆栽は捨てるべきだ」

日本を批評するのに盆栽的だと云ふことが云はれる。此の一語は実に適切であると思ふ。先ず日本の国土自体が甚だ盆栽的である。海洋中に緑樹茂る島々は其の一つ一つが其のまま盆栽である。又実際に小さい鉢に百年の松柏を植ゑて床に其の風流を賞する盆栽が好きである。各々の家にささやかな假山を造って鑑賞する盆栽のやや大きなものである。権門富貴の人々は景色の好き処に別荘を造る。遠景は大きなものあれども又近景に必ず遠州好み石州流の庭を造る、又やや其の大なる盆栽である。其の食するや一人一人が小さな膳を並べて色とりどりなる皿小鉢に又色とりどりなる目を楽しませる料理を盛る。此れも一種の盆栽である。其の膳を数並べて老人に父母に小児少女があてやかなる、地味なる異状に進歩せる染色の粋を身にまとふて居ならば部屋が又其のまま盆栽である。かくて先ず盆栽的と云ふ評語の如何に適切であるかを覗ふことが出来る。更に其の人々の行為する処、行動する処が如何に仕掛けが小さいかと云ふことから其の人々の気持ちの潔癖さに至るまで誠に盆栽其のままである。盆栽の特徴は野に放てば亭々天を摩する大樹となるものを小さな鉢に植ゑて大きくならせないのである。つまり大男になる人間をワザワザ小人につくるのである。私は何日でも軽業やサーカスなどにつれられて来る小人の姿を見るとスグに盆栽を思ふのである。アーこましゃくれた小人の姿こそ盆栽の樹々と全く同じである。私も日本人なるが故に一応盆栽の風雅とか枝振りとかに其の好きを見はするが、スグに其の自然さに腹だたしくさへなるのである。何故にもっと自由に育てないのか。彼の小さな鉢の中にワザワザイジメられたまま子の子の様な育て方をするのであろうか。私には其の鑑賞に何か欠陥と云ふか間違ひと云ふかするものが心理的にあるのではないかとさへも感じられるのである。兎に角盆栽は不自然を鑑賞するのであると思ふ時に日本人の心理の不自然さに眼を見はるものである。心理が不自然なるが故に鑑賞が不自然になるのか、不自然なる盆栽を鑑賞するが故に心理が不自然になったのか私には解らんが、これはなかなか容易ならんことであると思ふ。世の中にすくすくとすなほに育つ可き人をワザワザ片輪にする人があるであらうか。片輪の人を喜ぶ人があるであらうか。すくすくと天廳にもそびゆべき樹々を小さい鉢に植ゑて片輪ものにして鑑賞するとは何としてもそれは変態的である。そんな鑑賞は片輪であると私は思はざるを得ないのである。日本の国土から其の衣食住の悉くが盆栽的であるが故に、遂に盆栽が鑑賞される様になったのであろうか。盆栽の鑑賞が衣食住をまでも盆栽的にならせたのであろうか。兎に角日本人の盆栽的なのは其の不自然さの鑑賞にある。古い何とか云ふ皇帝が少しほんやりの娘を愛したと云ふことが中国にあるが、それは変態である日本人の盆栽趣味が彷彿として感じられる。吾々は思ひを此処に致して一日も早く此の不自然さを鑑賞する変態から脱却しなくてはならん。盆栽を捨てよ、小鉢から樹々を解放せよ。

一九四六年五月一日

「盆栽に就いて」

日本人のすることは何事でも盆栽的だと云ふことが云はれる。それは多くの場合甚だ小さいと云ふ意味が多分に考へられて居ると思ふのであるが、私はこの評言の中にはタダ小さいと云ふだけでなくもっとも大切なことが意味されて居ると思ふのである。自然のままに放って置けば亭々として天廳にそびゆる大樹ともなるべき樹々を、小鉢に入れてワザワザ大きくならせないのである。其処には実に不自

然と云ふことがある。此れが匿されて居る大きな意味である。つまり盆栽の鑑賞と云ふことには不自然を鑑賞すると云ふことが不知不識の間に習慣づけられるのである。而も尚タダ不自然だけでなく実^{じつ}に出来る丈^{だけ}かたわものをより喜ぶと云ふ変態的な鑑賞が習慣になるのである。世の中には中国のお茶の樹の様に自然に荒地に出来て風雪霜雨にたたかれて其処に鍛錬と云ふか猛特訓と云ふかイジメてイジメてイジメぬかれた其の葉に枯淡の味を賞でることもある。其の結果として茶樹の栽培が又出来るだけ荒地に植ゑて肥料も手入れもしないで自然のままにまかせる様になった。其処で中国のお茶の鑑賞は割合にふかい鑑賞ぶりである。一寸変態的でもある。此れは甚だ日本人の盆栽的に似てゐるが、それは中国人の普通の鑑賞ではない極めて一小部分の鑑賞である。処が日本の盆栽の鑑賞は此れに比べると非常に普遍して居るのである。日本人は盆栽的だと云はれる程に普遍して居るのである。そしてそれは不知不識、不自然を鑑賞する習慣になって居るのである。其の上に尚小さいことを喜ぶ習慣にもなって居るのである。此の点になると中国人とは大体に於いて反対である。中国人は自然に絶対を見て其の自然の前には極めて敬虔である。中国人は不自然を嫌ふ人間である。中国人は盆栽と云ふものに向^{むか}趣味がない様である。全く無いことはないが、日本人に比べると無いと云ふてよい程である。日本人の盆栽趣味は実は盆栽に淫してゐると云ふたらよと思ふ。中国では芝居好きの人を劇迷と云ふが日本人の盆栽好きは確かに盆栽迷であると思ふ。而も誰一人として此の趣味が不自然を鑑賞するものであるとか変態的鑑賞であるとか思ふて居る人はあるまいと思ふ。余程自覚してる人で小仕掛けな物が好きになる位の自覚よりないと思ふ。私は盆栽鑑賞は日本人の一つの錯覚であると思ふ。盆栽がかくの如き変態心理にならしめたのか、変態心理が盆栽を愛玩せしめる様になったのか知らんが、日本の社会が又よく似て居る。盆栽は樹の自由を奪ふものである。そしてかたわの樹をつくって喜んで居るのである。此くの如き心理の持主が人を育てる時に其の不知識らず抱いてゐるこのかたわ鑑賞の心理がどんな影響をするであらうか云ふまでもあるまい。日本人は盆栽的だと批評されて居ることは何よりの証拠である。新日本を建設せんとする吾等日本人は其の手から先ず盆栽を棄つべきである。此の事なくしては自由と自然とは日本人の手には来ないであらうと思ふ。

一九四六年五月一日

「ファーブル」

今日是一つみなさんが偉い人になるお手本をお話しませう。

一八二三年にフランスのサン・レオンと云ふ処の貧乏な家に赤ちゃんが生まれました。其の名をファーブルとつけました。お父さんお母さんが此の子供に勉強させ様と思ひますが、貧乏でお金がありませんから困りました。処が此のファーブルと云ふ子供は大変勉強がしたいのですが、それが出来ない。トウトウお金のいらぬ師範学校に入学して勉強して小学校の先生になりました。それから一人で勉強しました。そして数学と物理学とは中学校の先生が出来る様になりました。そして名高いナポレオンが島流しにされたコルシカ島と云ふ島の中学校の先生に行きました。ファーブルは考へました。自分は他の人よりもズット偉い学者になり度い、一体どうしたら他の人よりも偉い学者になれるであらうかと考へました。そして先ず他のどの人よりも二時間丈早く朝起きをすることにしました。他の人が未だ寝てゐますから大変静かであります。本を読んでも文を書いても思ふ様に勉強ができます。サア嬉しくて仕方ありません。ファーブルは勉強に飽くと野道や河原へ一寸散歩に出かけました。誰も出てゐないから野道も河原も又静かであります。ブラブラと歩いて居ると頭のつかれが治って頭が軽くなります。ファーブルは毎日朝二時間他の人よりも早く起きることをつづけました。一ヶ月二ヶ月三ヶ月とそして勉強したり散歩したりしたのであります。或る日のこと今日は何日もよりもモウ一時間早く眼が覚めたので十分に勉強が出来た。一時間半も勉強したのでスグに散歩に出かけました。河原をブラブラと歩いてる中にフト見つけたのは一匹のジガ蜂が大きなヨトウ虫を前に置いて何かしてるのであります。ファー

ブルはジット立ち止ってそれを見ました。ジガ蜂はヨトウ虫をどうして捕えたのでせうか。ジガ蜂はヨトウ虫の腹の方にとまってお尻から剣を出してキュウッとさしました。蜂がさすと痛いすネー。丁度お医者様の注射と同じですネー。蜂の注射であります。するとヨトウ虫は痛いのでクルリクルリとヒックリ返りますが暫くすると一寸おとなしくなります。ジガ蜂は又ヨトウ虫のお腹の上にとまってお尻から剣を出してキュウッと注射をしました。又ヨトウ虫はクルリクルリとヒックリ返りますが暫くすると又おとなしくなります。するとジガ蜂は又お腹へ一本注射します。そしてトウトウ八本注射いたしました。ファーブルはジット見て居りました。ジガ蜂はヨトウ虫を動かして見ましたが、生きては居るがもう少しも動きません。ジガ蜂はヨトウ虫を自分の巣の中に引きずり込んで終ひました。ファーブルは帰って来ました。又明日も勉強の後散歩に出ました。昨日のジガ蜂とヨトウ虫とのことが気になってなりません。コウしたことからファーブルは昆虫の研究をはじめました。トウトウファーブルは死ぬる迄六十年間昆虫の研究をつづけました。そして其の間に沢山の昆虫についての本を沢山書きました。中でも『昆虫記』と云ふ十冊の本は世界の宝と云はれるものであります。書いた人ファーブルが世界の宝であることは云ふ迄もありません。私は百人の戦争の好きな大将よりも一人のファーブルの様な学者が日本に生まれる様にと祈って居ります。

一九四六年五月一日